

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 特 許 公 報 (B2)

(11) 特許番号

特許第5566548号
(P5566548)

(45) 発行日 平成26年8月6日 (2014. 8. 6)

(24) 登録日 平成26年6月27日 (2014. 6. 27)

(51) Int. Cl.

F 1

A 6 1 B 1/00 (2006. 01)

A 6 1 B 1/00 3 0 0 B

請求項の数 6 (全 28 頁)

(21) 出願番号	特願2014-13751 (P2014-13751)	(73) 特許権者	304050923
(22) 出願日	平成26年1月28日 (2014. 1. 28)		オリンパスメディカルシステムズ株式会社
(62) 分割の表示	特願2013-552032 (P2013-552032)		東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番2号
原出願日	平成25年4月11日 (2013. 4. 11)	(74) 代理人	100108855
(65) 公開番号	特開2014-97418 (P2014-97418A)		弁理士 蔵田 昌俊
(43) 公開日	平成26年5月29日 (2014. 5. 29)	(74) 代理人	100109830
審査請求日	平成26年2月13日 (2014. 2. 13)		弁理士 福原 淑弘
(31) 優先権主張番号	特願2012-202943 (P2012-202943)	(74) 代理人	100103034
(32) 優先日	平成24年9月14日 (2012. 9. 14)		弁理士 野河 信久
(33) 優先権主張国	日本国 (JP)	(74) 代理人	100075672
早期審査対象出願			弁理士 峰 隆司
		(74) 代理人	100153051
			弁理士 河野 直樹
		(74) 代理人	100140176
			弁理士 砂川 克

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 内視鏡装置

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

長手軸に沿って延設される挿入部を備え、前記挿入部は、先端部に観察窓を備える内視鏡と、

前記内視鏡に取付けられる内視鏡洗浄シースと、

前記内視鏡洗浄シースにおいて前記長手軸に沿って延設され、基端方向から先端方向へ流体を送ることが可能な流体管路が形成されるシース本体と、

前記内視鏡洗浄シースにおいて前記シース本体の先端部に固定される先端側固定部であって、前記内視鏡洗浄シースが前記内視鏡に取付けられた状態において、前記流体管路を通った前記流体を前記内視鏡の前記観察窓に向かって出射可能な流体出射部を備える先端側固定部と、

前記シース本体の内部に前記長手軸に沿って延設され、前記内視鏡の前記挿入部を挿入可能な内視鏡挿入管路であって、前記長手軸に平行な方向について全長に渡って第1の径寸法を有する内視鏡挿入管路と、

前記内視鏡挿入管路の先端と連通する基端と、前記先端側固定部の外部に対して開口する先端と、を有し、前記先端側固定部の内部に延設される中継管路であって、前記中継管路の少なくとも一部は、前記第1の径寸法より小さく、かつ、前記内視鏡の前記挿入部の外径寸法より大きい第2の径寸法になる中継管路と、

を具備する内視鏡装置。

【請求項 2】

10

20

前記シース本体は、前記長手軸に平行な前記方向について全長に渡って前記長手軸に垂直な断面が同一形状に形成される、請求項 1 の内視鏡装置。

【請求項 3】

前記先端側固定部は、前記シース本体より硬い材料から形成される、請求項 1 の内視鏡装置。

【請求項 4】

前記挿入部の前記外径寸法と前記中継管路の前記第 2 の径寸法との差は、0.1 mm 以下である、請求項 1 の内視鏡装置。

【請求項 5】

前記先端側固定部において前記中継管路の内表面にコーティングされる撥水コーティングをさらに具備する、請求項 1 の内視鏡装置。

10

【請求項 6】

前記挿入部は、前記長手軸に垂直な湾曲方向に湾曲可能な湾曲部を備え、
前記湾曲部は、前記内視鏡洗浄シースが前記内視鏡に取付けられた状態において、前記中継管路の前記基端より基端方向側に位置している、
請求項 1 の内視鏡装置。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、挿入部の先端部に観察窓が設けられる内視鏡、及び、前記内視鏡に取付けられる内視鏡洗浄シースを備える内視鏡装置に関する。

20

【背景技術】

【0002】

特許文献 1 には、挿入部の先端部に観察窓が設けられる内視鏡に取付けられる内視鏡洗浄シースが、開示されている。この内視鏡洗浄シースは、シース本体であるマルチルーメンチューブ (multi-lumen tube) を備える。マルチルーメンチューブには、内視鏡の挿入部を挿入可能な内視鏡挿入管路が、長手軸に沿って規定されている。また、マルチルーメンチューブには、流体として空気を基端方向から先端方向へ送気可能な送気管路、及び、流体として水を基端方向から先端方向へ送水可能な送水管路が、流体管路として規定されている。マルチルーメンチューブの先端部には、先端側固定部が固定されている。先端側固定部には、送気管路と送水管路とを合流させる合流部と、合流部で合流した空気及び水を出射可能な流体出射部であるノズルと、が設けられている。内視鏡洗浄シースが内視鏡に取付けられた状態において、挿入部の観察窓に向かって合流した空気及び水を出射可能である。観察窓に空気及び水が出射されることにより、体腔内での内視鏡による被写体の観察において、挿入部を体腔から抜脱することなく、観察窓に付着した汚れを洗浄可能となる。

30

【0003】

特許文献 2 にも、挿入部の先端部に観察窓が設けられる内視鏡に取付けられる内視鏡洗浄シースが、開示されている。この内視鏡洗浄シースにも、シース本体であるマルチルーメンチューブ及び先端側固定部が、設けられている。そして、マルチルーメンチューブに、内視鏡挿入管路、送気管路及び送水管路が、設けられている。また、先端側固定部に、送気管路と送水管路との合流部、及び、挿入部の観察窓に合流した空気及び水を出射可能な流体出射部であるノズルが設けられている。この内視鏡洗浄シースでは、内視鏡洗浄シースが内視鏡に取付けられた状態において、挿入部の観察窓を拭払い可能なワイパーが設けられている。ワイパーには、ワイヤの先端が接続されている。マルチルーメンチューブには、合流部に連通するワイヤ管路が設けられている。また、マルチルーメンチューブの基端部には、基端側固定部が固定されている。ワイヤは、合流部及びワイヤ管路を通して、基端が引張りばねを介して基端側固定部に接続されている。ノズルから空気及び水が出射されない状態では、引張りばねの付勢力によってワイパーはノズルと観察窓との間に位置し、ワイパーは観察窓を通しての視野から外れている。一方、ノズルから空気及び水が

40

50

出射される状態では、出射圧によって、付勢力に反してワイパーが観察窓に向かって移動する。これにより、ワイパーによって観察窓が拭かれる。

【先行技術文献】

【特許文献】

【0004】

【特許文献1】特開2009-247566号公報

【特許文献2】特開2008-279202号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

前記特許文献1及び前記特許文献2のそれぞれの内視鏡洗浄シースでは、シース本体であるマルチルーメンチューブの先端面に先端側開口部が設けられている。そして、内視鏡挿入管路の先端が、先端側開口部で、先端側固定部材の外部に対して直接的に開口している。このような構成の場合、内視鏡洗浄シースを内視鏡に取付けた状態において、内視鏡挿入管路を規定する挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間に、先端開口部から水が流入し易い。このため、挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間に、水が溜まり易い。挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間に水が溜まった状態で観察窓を通して観察を行った場合、挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間から挿入部の先端面に水が流出する可能性がある。挿入部の先端面に水が流出することにより、観察窓に水が付着し、被写体の観察性能が低下してしまう。

マルチルーメンチューブにおいて内視鏡挿入管路の径寸法を小さくすることにより、挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間は、小さくなる。しかし、シース本体であるマルチルーメンチューブは、押し出し成形によって形成されるため、長手軸に平行な方向について全長に渡って長手軸に垂直な断面が同一形状となる。このため、内視鏡挿入管路の径寸法を小さくする場合には、長手軸に平行な方向について全長に渡って内視鏡挿入管路の径寸法を小さくする必要がある。また、一般に、マルチルーメンチューブは可撓性を有する材料から形成されている。全長に渡って径寸法が小さい内視鏡挿入管路が可撓性を有するマルチルーメンチューブに形成される場合、挿入部の内視鏡挿入管路での移動において、挿入部の外周部と挿入管路規定部との間の摩擦抵抗が大きくなる。このため、内視鏡挿入管路への挿入部の挿入性及び内視鏡挿入管路からの挿入部の抜脱性が低下してしまう。すなわち、内視鏡挿入管路での挿入部の移動性が低下してしまう。

【0006】

本発明は前記課題に着目してなされたものであり、その目的とするところは、挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間に水が溜まり難く、内視鏡挿入管路での挿入部の移動性が確保される内視鏡装置を提供することにある。

【課題を解決するための手段】

【0007】

前記目的を達成するため、本発明のある態様の内視鏡装置は、長手軸に沿って延設される挿入部を備え、前記挿入部は、先端部に観察窓を備える内視鏡と、前記内視鏡に取付けられる内視鏡洗浄シースと、前記内視鏡洗浄シースにおいて前記長手軸に沿って延設され、基端方向から先端方向へ流体を送ることが可能な流体管路が形成されるシース本体と、前記内視鏡洗浄シースにおいて前記シース本体の先端部に固定される先端側固定部であって、前記内視鏡洗浄シースが前記内視鏡に取付けられた状態において、前記流体管路を通った前記流体を前記内視鏡の前記観察窓に向かって出射可能な流体出射部を備える先端側固定部と、前記シース本体の内部に前記長手軸に沿って延設され、前記内視鏡の前記挿入部を挿入可能な内視鏡挿入管路であって、前記長手軸に平行な方向について全長に渡って第1の径寸法を有する内視鏡挿入管路と、前記内視鏡挿入管路の先端と連通する基端と、前記先端側固定部の外部に対して開口する先端と、を有し、前記先端側固定部の内部に延設される中継管路であって、前記中継管路の少なくとも一部は、前記第1の径寸法より小さく、かつ、前記内視鏡の前記挿入部の外径寸法より大きい第2の径寸法になる中継管

路と、を備える。

【発明の効果】

【0008】

本発明によれば、挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間に水が溜まり難く、内視鏡挿入管路での挿入部の移動性が確保される内視鏡装置を提供することができる。

【図面の簡単な説明】

【0009】

【図1】第1の参照例に係る内視鏡装置の構成を示す概略図である。

【図2】第1の参照例に係る内視鏡洗浄シースの構成を一部側面で概略的に示す断面図である。

10

【図3】図2のIII-III線断面図である。

【図4】第1の参照例に係る内視鏡に内視鏡洗浄シースが取付けられた状態での、先端側固定部及び先端本体部の構成を示す概略図である。

【図5】第1の参照例に係るマルチルーメンチューブが長手軸に平行な方向について伸長していない状態における、ある1つの第1の孔及びある1つの第2の孔の近傍でのマルチルーメンチューブ及び線状部の構成を概略的に示す断面図である。

【図6】第1の参照例に係る内視鏡への内視鏡洗浄シースの取付けにおいて、内視鏡の挿入部の先端面がある1つの第1の孔より基端方向側に位置する状態を示す概略図である。

【図7】第1の参照例に係る内視鏡への内視鏡洗浄シースの取付けにおいて、長手軸に平行な方向について内視鏡の挿入部の先端面がある1つの第1の孔まで移動した状態を示す概略図である。

20

【図8】第1の参照例に係る内視鏡への内視鏡洗浄シースの取付けにおいて、挿入部の先端面がある1つの第2の孔より先端方向側に位置する状態を示す概略図である。

【図9】第1の参照例に係る内視鏡への内視鏡洗浄シースの取付けにおいて、内視鏡の挿入部の先端面が、最も先端方向側に位置する第2の孔より先端方向側に移動した状態を示す概略図である。

【図10A】第2の参照例に係る内視鏡への内視鏡洗浄シースの取付けにおいて、内視鏡の挿入部の先端面が、最も先端方向側に位置する第2の孔より先端方向側に移動した状態を示す概略図である。

【図10B】第1の参照例に係るマルチルーメンチューブが長手軸に平行な方向について伸長した状態における、ある1つの第1の孔及びある1つの第2の孔の近傍でのマルチルーメンチューブ及び線状部の構成を概略的に示す断面図である。

30

【図11】第3の参照例に係るある1つの第1の孔及びある1つの第2の孔の近傍でのマルチルーメンチューブ及び線状部の構成を概略的に示す断面図である。

【図12】第4の参照例に係るある1つの第1の孔及びある1つの第2の孔の近傍でのマルチルーメンチューブ及び線状部の構成を概略的に示す断面図である。

【図13】第5の参照例に係る内視鏡洗浄シースの構成を概略的に示す断面図である。

【図14A】第6の参照例に係る内視鏡洗浄シースのマルチルーメンチューブの内部構成を概略的に示す断面図である。

【図14B】第7の参照例に係る内視鏡洗浄シースのマルチルーメンチューブの内部構成を概略的に示す断面図である。

40

【図15A】第8の参照例に係る内視鏡洗浄シースの構成を概略的に示す断面図である。

【図15B】第9の参照例に係る内視鏡洗浄シースの先端側固定部を先端方向側から見た概略図である。

【図16】第10の参照例に係る内視鏡洗浄シースの構成を概略的に示す斜視図である。

【図17】第10の参照例に係る内視鏡洗浄シースのある1つの孔の近傍でのマルチルーメンチューブ及び線状部の構成を概略的に示す斜視図である。

【図18】第10の参照例に係る内視鏡洗浄シースのある1つの孔の近傍でのマルチルーメンチューブ及び線状部の構成を概略的に示す断面図である。

【図19A】第10の参照例に係る内視鏡へ内視鏡洗浄シースが取付けられた状態での、

50

ある１つの孔の近傍での線状部の延設状態を示す概略図である。

【図１９Ｂ】第１０の参照例に係る挿入部が内視鏡挿入管路を基端方向へ移動している状態での、ある１つの孔の近傍での線状部の延設状態を示す概略図である。

【図２０】第１１の参照例に係る内視鏡洗浄シースの構成を概略的に示す斜視図である。

【図２１】第１２の参照例に係る内視鏡洗浄シースの構成を概略的に示す斜視図である。

【図２２】第１３の参照例変形例に係る内視鏡洗浄シースの構成を概略的に示す斜視図である。

【図２３】第１４の参照例に係る内視鏡洗浄シースのマルチルーメンチューブの内部構成を概略的に示す断面図である。

【図２４】第１５の参照例に係る内視鏡洗浄シースのマルチルーメンチューブの内部構成を概略的に示す断面図である。

【図２５】第１の実施形態に係る内視鏡洗浄シースの構成を概略的に示す断面図である。

【図２６】図２５の２６－２６線断面図である。

【図２７】図２５の２７－２７線断面図である。

【図２８】第１の実施形態に係る内視鏡に内視鏡洗浄シースが取付けられた状態での、内視鏡の先端部及び内視鏡洗浄シースの先端部の構成を概略的に示す断面図である。

【図２９】第１の変形例に係る内視鏡洗浄シースの先端部の構成を概略的に示す断面図である。

【図３０】第２の変形例に係る内視鏡洗浄シースの先端部の構成を概略的に示す断面図である。

【図３１】第３の変形例に係る内視鏡洗浄シースの先端部の構成を概略的に示す断面図である。

【図３２】第４の変形例に係る内視鏡洗浄シースの先端部の構成を概略的に示す断面図である。

【発明を実施するための形態】

【００１０】

（参照例）

まず、本発明に関連する参照例について説明する。第１の参照例について、図１乃至図９、及び図１０Ｂを参照して説明する。

【００１１】

図１は、内視鏡装置１の構成を示す図である。図１に示すように、内視鏡装置１は、長手軸Ｃを有する。長手軸Ｃに平行な方向の一方が先端方向（図１の矢印Ｃ１の方向）となり、先端方向の反対方向が基端方向（図１の矢印Ｃ２の方向）となる。内視鏡装置１は、内視鏡２と、内視鏡２に取付けられる内視鏡洗浄シース３と、を備える。

【００１２】

内視鏡２は、例えば硬性鏡である。内視鏡２は、長手軸Ｃに沿って延設される挿入部５と、挿入部５の基端方向側に設けられる操作部６と、を備える。操作部６には、ユニバーサルコード７の一端が接続されている。挿入部５は、挿入部５の先端面１０を形成する先端本体部８と、先端本体部８の基端方向側に設けられる湾曲部９と、を備える。湾曲部９は、挿入部５の先端部に設けられ、長手軸Ｃに垂直な２方向に湾曲可能である。すなわち、図１の矢印Ｂ１の方向及び矢印Ｂ２の方向が、湾曲部９が湾曲可能な湾曲方向となる。なお、本参照例では長手軸Ｃに垂直な２方向に湾曲部９が湾曲可能であるが、長手軸Ｃに垂直な４方向に湾曲部９が湾曲可能であってもよい。操作部６には、湾曲部９の湾曲操作が入力される湾曲操作部である湾曲操作レバー１１が設けられている。

【００１３】

ユニバーサルコード７の他端は、観察制御ユニット１２に接続されている。観察制御ユニット１２は、画像プロセッサ等の画像処理部（図示しない）と、光源部（図示しない）と、を備える。観察制御ユニット１２の画像処理部は、表示部であるモニタ１３に電氣的に接続されている。挿入部５の先端面１０（先端部）には、観察窓１５及び照明窓１６Ａ、１６Ｂが設けられている。挿入部５の内部には、２つのライトガイド（図示しない）が

10

20

30

40

50

長手軸 C に沿って延設されている。ライトガイドは、操作部 6 の内部及びユニバーサルコード 7 の内部を通して、観察制御ユニット 12 の光源部に光学的に接続されている。光源部から出射された光は、ライトガイドによって導光される。そして、照明窓 16A, 16B を通して、導光された光が被写体に照射される。

【0014】

先端本体部 8 の内部には、CCD 等の撮像素子（図示しない）が設けられている。撮像素子により、被写体の撮像が行われる。撮像素子には、撮像ケーブル（図示しない）の一端が接続されている。撮像ケーブルは、挿入部 5 の内部、操作部 6 の内部、及び、ユニバーサルコード 7 の内部を通して、他端が観察制御ユニット 12 の画像処理部に接続されている。撮像素子で被写体が撮像され、画像処理部に撮像ケーブルを介して電気信号が伝達されることにより、画像処理部で画像処理が行われ、被写体の画像が生成される。生成された被写体の画像は、モニタ 13 に表示される。

10

【0015】

図 2 は、内視鏡洗浄シース 3 の構成を示す図である。図 1 及び図 2 に示すように、内視鏡洗浄シース 3 は、長手軸 C に沿って延設されるシース本体であるマルチルーメンチューブ 21 を備える。マルチルーメンチューブ 21 は、シリコン（silicone）、ウレタン（urethane）等の軟らかい材料から形成され、可撓性を有する。このため、挿入部 5 の湾曲部 9 の湾曲動作に追従して、マルチルーメンチューブ 21 は湾曲可能である。

【0016】

マルチルーメンチューブ 21 の先端部には、先端側固定部 22 が固定されている。また、マルチルーメンチューブ 21 の基端部には、基端側固定部 23 が固定されている。先端側固定部 22 及び基端側固定部 23 は、マルチルーメンチューブ 21 より硬い材料から形成され、可撓性を有さない。

20

【0017】

基端側固定部 23 には、送気チューブ 25 の一端が接続されている。送気チューブ 25 の他端は、送気ユニット 26 に接続されている。送気ユニット 26 は、送気ポンプ 27 と、圧力調整弁 28 と、備える。送気ポンプ 27 を駆動することにより、流体である空気が、調整された圧力で、送気チューブ 25 を通って供給される。

【0018】

基端側固定部 23 には、送水チューブ 31 の一端が接続されている。送水チューブ 31 の他端は、送水ユニット 32 に接続されている。送水ユニット 32 は、送水ポンプ 33 と、送水タンク 35 と、を備える。送水ポンプ 33 を駆動することにより、送水タンク 35 から流体である水が、送水チューブ 31 を通って供給される。

30

【0019】

図 3 は、図 2 の III-III 線断面図である。図 2 及び図 3 に示すように、マルチルーメンチューブ 21 には、挿入管路規定部 36 によって、内視鏡挿入管路 37 が長手軸 C に沿って規定されている。内視鏡挿入管路 37 には、内視鏡 2 の挿入部 5 を挿入可能である。先端側固定部 22 には、内視鏡挿入管路 37 と連通する先端側開口部 38 が設けられている。また、基端側固定部 23 には、内視鏡挿入管路 37 と連通する基端側開口部 39 が設けられている。基端側開口部 39 から内視鏡挿入管路 37 に挿入部 5 を挿入することにより、内視鏡洗浄シース 3 が内視鏡 2 に取付けられる。また、先端側固定部 22 には、挿入部 5 の先端面 10 が当接可能な当接部 40 が設けられている。内視鏡洗浄シース 3 が内視鏡 2 に取付けられた状態では、当接部 40 は挿入部 5 の先端面 10 に当接している。

40

【0020】

図 3 に示すように、マルチルーメンチューブ 21 には、流体管路規定部 41 によって、送気管路 42 が長手軸 C に沿って規定されている。また、マルチルーメンチューブ 21 には、流体管路規定部 41 によって、送水管路 43 が長手軸 C に沿って規定されている。送気管路 42 及び送水管路 43 は、互いに対して分離された状態で、規定されている。また、送気管路 42 及び送水管路 43 は、挿入管路規定部 36 及び流体管路規定部 41 によって、内視鏡挿入管路 37 から分離されている。なお、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取

50

付けられた状態では、図 3 の矢印 B 1 の方向及び矢印 B 2 の方向が、内視鏡 2 の湾曲部 9 の湾曲方向となる。したがって、送気管路 4 2 及び送水管路 4 3 は、長手軸回り方向について、湾曲部 9 の湾曲方向の一方（矢印 B 1 の方向）から略 135°だけ離れて、位置している。また、送気管路 4 2 及び送水管路 4 3 は、長手軸回り方向について、湾曲部 9 の湾曲方向の他方（矢印 B 2 の方向）から略 45°だけ離れて、位置している。すなわち、送気管路 4 2 及び送水管路 4 3 は、長手軸回り方向について、湾曲部 9 の湾曲方向からずれた角度位置に、位置している。

【0021】

基端側固定部 2 3 には、送気チューブ 2 5 の内部と送気管路 4 2 との間を中継する送気中継部（図示しない）が設けられている。送気中継部に、送気制御弁（図示しない）が設けられている。また、基端側固定部 2 3 には、送水チューブ 3 1 の内部と送水管路 4 3 との間を中継する送水中継部（図示しない）が設けられている。送水中継部に、送水制御弁（図示しない）が設けられている。

10

【0022】

また、基端側固定部 2 3 には、制御弁操作部である制御弁操作ボタン 4 5 が取付けられている。制御弁操作ボタン 4 5 を押圧することにより、送気制御弁で送気中継部が開いた状態になり、送気チューブ 2 5 から送気中継部を通して、送気管路 4 2 に空気が送気される。そして、送気管路 4 2 において、基端方向から先端方向へ空気が送気される。また、制御弁操作ボタン 4 5 を押圧することにより、送水制御弁で送水中継部が開いた状態になり、送水チューブ 3 1 から送水中継部を通して、送水管路 4 3 に水が送水される。そして、送水管路 4 3 において、基端方向から先端方向へ水が送水される。以上のように、送気管路 4 2 及び送水管路 4 3 は、基端方向から先端方向へ流体を送ることが可能な流体管路となっている。

20

【0023】

図 4 は、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態での、先端側固定部 2 2 及び先端本体部 8 の構成を示す図である。図 4 に示すように、先端側固定部 2 2 には、送気管路 4 2 と送水管路 4 3 とを合流させる合流部 4 7 が設けられている。合流部 4 7 で、送気管路 4 2 を通った空気と送水管路 4 3 を通った水とが、合流する。また、先端側固定部 2 2 には、合流部 4 7 で合流した空気及び水を出射可能な流体出射部であるノズル 4 8 が、設けられている。内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態では、観察窓 1 5 に向かって空気及び水が出射される。すなわち、ノズル 4 8 は、観察窓 1 5 に向かって流体を出射可能である。

30

【0024】

図 2 及び図 3 に示すように、先端側固定部 2 2 と基端側固定部 2 3 との間では、内視鏡挿入管路 3 7 を通って、線状部 5 1 が延設されている。線状部 5 1 の先端は、先端側接続位置 P 1 で先端側固定部 2 2 に固定されている。また、線状部 5 1 の基端は、基端側接続位置 P 2 で基端側固定部 2 3 に固定されている。線状部 5 1 は、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間で、線芯軸 L に沿って延設されている。線芯軸 L が、線状部 5 1 の中心軸となる。線状部 5 1 は、アラミド繊維、ナイロン繊維、ポリエチレン繊維、ポリアリレート繊維等の繊維から形成され、マルチルーメンチューブ 2 1 より長手軸 C に平行な方向についての引張り強度が高くなっている。このため、線状部 5 1 は、長手軸 C に平行な方向に引張られた場合でも伸長しない程度の耐強度を有する。

40

【0025】

先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間の線状部 5 1 の線芯軸 L に沿った線寸法 S 1 は、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間での長手軸 C に沿った軸平行寸法 S 2 より、大きくなる。また、線状部 5 1 は、長手軸回り方向について、内視鏡 2 の湾曲部 9 の湾曲方向の一方（図 3 の矢印 B 1 の方向）と略同一の角度位置に、位置している。また、線状部 5 1 の先端側接続位置 P 1 は、長手軸回り方向についてノズル 4 8 から略 180°離れた角度位置に、位置している。

【0026】

50

図 1 及び図 2 に示すように、シース本体であるマルチルーメンチューブ 2 1 には、第 1 の孔規定部 5 3 によって複数の第 1 の孔 5 5 A , 5 5 B が規定され、第 2 の孔規定部 5 6 によって第 1 の孔 5 5 A , 5 5 B とは別個の複数の第 2 の孔 5 7 A , 5 7 B が規定されている。第 1 の孔 5 5 A は、第 1 の孔 5 5 B よりも基端方向側に位置している。また、第 2 の孔 5 7 A は、第 2 の孔 5 7 B より基端方向側に位置している。図 5 は、ある 1 つの第 1 の孔 5 5 A 及びある 1 つの第 2 の孔 5 7 A の近傍でのマルチルーメンチューブ 2 1 及び線状部 5 1 の構成を示す図である。なお、以下では、第 1 の孔 5 5 A 及び第 2 の孔 5 7 A の近傍の構成についてのみ説明するが、第 1 の孔 5 5 B 及び第 2 の孔 5 7 B の近傍の構成、についても同様である。また、本参照例では、2 つの第 1 の孔 5 5 A , 5 5 B 及び 2 つの第 2 の孔 5 7 A , 5 7 B が設けられているが、1 つ以上の第 1 の孔 (5 5 A , 5 5 B) 及び 1 つ以上の第 2 の孔 (5 7 A , 5 7 B) が、マルチルーメンチューブ 2 1 に規定されていれよい。

10

【 0 0 2 7 】

図 5 に示すように、第 1 の孔 5 5 A によって、内視鏡挿入管路 3 7 とマルチルーメンチューブ 2 1 の外部との間が連通している。また、第 2 の孔 5 7 A によって、内視鏡挿入管路 3 7 とマルチルーメンチューブ 2 1 の外部との間が連通している。第 1 の孔 5 5 A は、第 2 の孔 5 7 A より基端方向側に位置している。すなわち、長手軸 C に平行な方向について第 1 の孔 5 5 A 及び第 2 の孔 5 7 A は、互いに対して離間している。

【 0 0 2 8 】

内視鏡挿入管路 3 7 では、線状部 5 1 は、第 1 の孔 5 5 A まで基端方向に向かって延設されている。そして、第 1 の孔 5 5 A において内視鏡挿入管路 3 7 からマルチルーメンチューブ 2 1 の外部に、線状部 5 1 が延出される。そして、マルチルーメンチューブ 2 1 の外周部において、線状部 5 1 が、第 1 の孔 5 5 A から第 2 の孔 5 7 A まで先端方向に向かって延設される。そして、第 2 の孔 5 7 A において、マルチルーメンチューブ 2 1 の外部から内視鏡挿入管路 3 7 に、線状部 5 1 が挿入される。そして、内視鏡挿入管路 3 7 において、第 2 の孔 5 7 A から基端方向に向かって、線状部 5 1 が延設される。前述のように線状部 5 1 が延設されることにより、第 1 の孔 5 5 A と第 2 の孔 5 7 A との間に、線状部 5 1 によってループ状部 5 9 が形成される。

20

【 0 0 2 9 】

次に、本参照例の内視鏡装置 1 の作用及び効果について説明する。内視鏡装置 1 では、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 を取付けた状態で、挿入部 5 及び内視鏡洗浄シース 3 を体腔内に挿入する。そして、撮像素子 (図示しない) によって観察窓 1 5 を通して、被写体を撮像する。観察窓 1 5 に汚れが付着した場合は、制御弁操作ボタン 4 5 を押圧する。これにより、送気管路 4 2 において基端方向から先端方向へ空気が送気され、送水管路 4 3 において基端方向から先端方向へ水が送水される。そして、合流部 4 7 において空気及び水が合流し、ノズル 4 8 から観察窓 1 5 に向かって空気及び水が出射される。これにより、挿入部 5 及び内視鏡洗浄シース 3 を体腔から抜脱することなく、観察窓 1 5 に付着した汚れが洗浄される。

30

【 0 0 3 0 】

ここで、内視鏡装置 1 での被写体の観察においては、マルチルーメンチューブ 2 1 に過大な外力が作用することがある。この場合、長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブ 2 1 が引張られる。マルチルーメンチューブ 2 1 には、先端側固定部 2 2 及び基端側固定部 2 3 が固定されている。そして、線状部 5 1 の先端が先端側固定部 2 2 に固定され、線状部 5 1 の基端が基端側固定部 2 3 に固定されている。線状部 5 1 は、マルチルーメンチューブ 2 1 より長手軸 C に平行な方向についての引張り強度が高く、長手軸 C に平行な方向に引張られた場合でも、伸長しない。線状部 5 1 を設けることにより、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 2 1 の引張り強度も高くなる。したがって、長手軸 C に平行な方向への引張りによる内視鏡洗浄シース 3 の破損が有効に防止される。

40

【 0 0 3 1 】

50

前述のように、線状部 5 1 を設けることにより、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 2 1 の引張り強度も高くなる。ただし、外力によって長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブ 2 1 が引張られた場合、長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブ 2 1 はある程度伸長する。また、湾曲部 9 の湾曲動作に追従してシース本体であるマルチルーメンチューブ 2 1 が湾曲する場合にも、湾曲外周側でマルチルーメンチューブ 2 1 は長手軸 C に平行な方向へ引張られる。この場合も、長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブ 2 1 は伸長する。さらに、内視鏡洗浄シース 3 が内視鏡 2 に取付けられた状態では、挿入部 5 の先端面 1 0 を先端側固定部 2 2 の当接部 4 0 に密着状態で当接させる必要がある。このため、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態では、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられていない状態に比べ、長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブ 2 1 が伸長する。

10

【 0 0 3 2 】

先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間の線状部 5 1 の線芯軸 L に沿った線寸法 S 1 は、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間での長手軸 C に沿った軸平行寸法 S 2 より、大きくなる。すなわち、線状部 5 1 には弛みが発生している。線状部 5 1 に弛みが発生することにより、長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブが伸長する場合でも、線状部 5 1 によってマルチルーメンチューブ 2 1 の伸長が阻害されない。このため、湾曲部 9 の湾曲動作に追従してマルチルーメンチューブ 2 1 が湾曲する場合に、線状部 5 1 によって湾曲部 9 の湾曲動作が阻害されない。したがって、長手軸 C に平行な方向への引張りによって伸長しない線状部 5 1 を設けた場合でも、湾曲部 9 の湾曲性が確保される。また、内視鏡洗浄シース 3 を内視鏡 2 に取付ける場合でも、線状部 5 1 によってマルチルーメンチューブ 2 1 の伸長が阻害されない。このため、内視鏡洗浄シース 3 を内視鏡 2 に取付ける作業性が向上する。

20

【 0 0 3 3 】

次に、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 を取付ける方法について説明する。前述のように、本参照例では、線状部 5 1 によってマルチルーメンチューブ 2 1 の伸長を阻害しないために、線状部 5 1 に弛みが発生している。すなわち、内視鏡挿入管路 3 7 において線状部 5 1 に弛みが発生してしまう。図 6 は、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の取付けにおいて、内視鏡 2 の挿入部 5 の先端面 1 0 がある 1 つの第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置する状態を示す図である。図 6 に示すように、内視鏡 2 へ内視鏡洗浄シース 3 を取付ける場合は、基端側開口部 3 9 から内視鏡挿入管路 3 7 に挿入部 5 を挿入する。ここで、内視鏡挿入管路 3 7 において線状部 5 1 に弛み E 1 ~ E 3 が発生している。挿入部 5 の先端面 1 0 が内視鏡挿入管路 3 7 の第 1 の孔 5 5 A より基端方向側の位置を先端方向へ移動する状態では、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置する弛み E 1 が、挿入部 5 の先端面 1 0 によって先端方向へ押圧される。これにより、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置する弛み E 1 が、先端方向へ移動する。

30

【 0 0 3 4 】

図 7 は、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の取付けにおいて、長手軸 C に平行な方向について内視鏡 2 の挿入部 5 の先端面 1 0 がある 1 つの第 1 の孔 5 5 A まで移動した状態を示す図である。図 8 は、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の取付けにおいて、挿入部 5 の先端面 1 0 がある 1 つの第 2 の孔 5 7 A より先端方向側に位置する状態を示す図である。図 7 に示すように、長手軸 C に平行な方向について内視鏡 2 の挿入部 5 の先端面 1 0 が第 1 の孔 5 5 A まで移動した状態では、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置していた弛み E 1 が、第 1 の孔 5 5 A の近傍まで先端方向へ移動する。ここで、線状部 5 1 は、第 1 の孔 5 5 A と第 2 の孔 5 7 A との間でマルチルーメンチューブ 2 1 の外周部に延設され、ループ状部 5 9 を形成している。このため、図 8 に示すように、第 2 の孔 5 7 A より先端方向側の部位まで挿入部 5 の先端面 1 0 が移動した場合も、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置していた弛み E 1 は、第 2 の孔 5 7 A より先端方向側に移動しない。

40

【 0 0 3 5 】

長手軸 C に平行な方向について第 2 の孔 5 7 A と第 1 の孔 5 5 B との間に位置する弛み

50

E 2においても、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置する弛み E 1 と同様に、挿入部 5 の先端面 1 0 によって、先端方向へ押圧される。これにより、第 2 の孔 5 7 A と第 1 の孔 5 5 B との間に位置する弛み E 2 は、第 1 の孔 5 5 B の近傍まで先端方向へ移動する。そして、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置する弛み E 1 と同様に、第 2 の孔 5 7 B より先端方向側の部位まで挿入部 5 の先端面 1 0 が移動した場合でも、第 2 の孔 5 7 A と第 1 の孔 5 5 B との間に位置していた弛み E 2 は、第 2 の孔 5 7 B より先端方向側に移動しない。

【 0 0 3 6 】

図 9 は、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の取付けにおいて、内視鏡 2 の挿入部 5 の先端面 1 0 が、第 2 の孔 5 7 A , 5 7 B の中で最も先端方向側に位置する第 2 の孔 5 7 B より先端方向側に移動した状態を示す図である。前述のように、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置していた弛み E 1 は第 2 の孔 5 7 A より先端方向側に移動せず、第 2 の孔 5 7 A と第 1 の孔 5 5 B との間に位置していた弛み E 2 は第 2 の孔 5 7 B より先端方向側に移動しない。このため、第 2 の孔 5 7 B より先端方向側の部位まで挿入部 5 の先端面 1 0 が移動した状態において、挿入部 5 の先端面 1 0 より先端方向側に線状部 5 1 の弛み E 1 ~ E 3 が密集せず、長手軸 C に平行な方向について内視鏡挿入管路 3 7 の全長に渡って線状部 5 1 の弛み E 1 ~ E 3 が分散される。すなわち、第 2 の孔 5 7 B より先端方向側の部位まで挿入部 5 の先端面 1 0 が移動した状態において、挿入部 5 の先端面 1 0 より先端方向側で線状部 5 1 の弛み量が大きくなる。これにより、挿入部 5 が内視鏡挿入管路 3 7 を先端方向へ移動する状態において、線状部 5 1 の弛み E 1 ~ E 3 が挿入部 5 に絡み難くなる。したがって、線状部 5 1 に弛み E 1 ~ E 3 が発生する場合でも、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 への挿入性が確保される。

【 0 0 3 7 】

なお、第 1 の参照例から線状部 5 1 の剛性を変化させた第 2 の参照例では、弛み E 1 ~ E 3 は、以下に示すように移動する。すなわち、図 1 0 A に示すように、弛み E 1 が第 1 の孔 5 5 A の近傍まで先端方向へ移動した状態で挿入部 5 の先端面 1 0 によって押圧されることにより、弛み E 1 は、線状部 5 1 (ループ状部 5 9) の第 1 の孔 5 5 A と第 2 の孔 5 7 A との間でマルチルーメンチューブ 2 1 の外周部に延設される部分に、移動する。第 1 の孔 5 5 A と第 2 の 5 7 A との間のマルチルーメンチューブ 2 1 の外周部に弛み E 1 が移動することにより、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置していた弛み E 1 は、挿入部 5 の先端面 1 0 によって先端方向へ押圧されなくなる。これにより、第 2 の孔 5 7 A より先端方向側の部位まで挿入部 5 の先端面 1 0 が移動した場合も、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置していた弛み E 1 は、第 2 の孔 5 7 A より先端方向側に移動しない。

【 0 0 3 8 】

長手軸 C に平行な方向について第 2 の孔 5 7 A と第 1 の孔 5 5 B との間に位置する弛み E 2 においても、第 1 の孔 5 5 A より基端方向側に位置する弛み E 1 と同様である。すなわち、弛み E 2 が第 1 の孔 5 5 B の近傍まで先端方向へ移動した状態で挿入部 5 の先端面 1 0 によって押圧されることにより、弛み E 2 は、線状部 5 1 (ループ状部 5 9) の第 1 の孔 5 5 B と第 2 の孔 5 7 B との間でマルチルーメンチューブ 2 1 の外周部に延設される部分に、移動する。これにより、第 2 の孔 5 7 A と第 1 の孔 5 5 B との間に位置していた弛み E 2 は、挿入部 5 の先端面 1 0 によって先端方向へ押圧されなくなる。このため、第 2 の孔 5 7 B より先端方向側の部位まで挿入部 5 の先端面 1 0 が移動した場合も、第 2 の孔 5 7 A と第 1 の孔 5 5 B との間に位置していた弛み E 2 は、第 2 の孔 5 7 B より先端方向側に移動しない。

【 0 0 3 9 】

したがって、第 2 の参照例においても、第 2 の孔 5 7 B より先端方向側の部位まで挿入部 5 の先端面 1 0 が移動した状態において、挿入部 5 の先端面 1 0 より先端方向側に線状部 5 1 の弛み E 1 ~ E 3 が密集しない。これにより、挿入部 5 が内視鏡挿入管路 3 7 を先端方向へ移動する状態において、線状部 5 1 の弛み E 1 ~ E 3 が挿入部 5 に絡み難くなる。したがって、線状部 5 1 に弛み E 1 ~ E 3 が発生する場合でも、挿入部 5 の内視鏡挿入

管路 37 への挿入性が確保される。

【0040】

図 10B は、長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブ 21 が伸長した状態における、ある 1 つの第 1 の孔 55A 及びある 1 つの第 2 の孔 57A の近傍でのマルチルーメンチューブ 21 及び線状部 51 の構成を示す図である。図 10B に示すように、長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブ 21 が伸長することにより、マルチルーメンチューブ 21 が伸長していない状態（図 5 参照）に比べ、先端側接続位置 P1 と基端側接続位置 P2 との間において、線状部 51 のループ状部 59 以外の部分の線芯軸 L に沿った寸法が大きくなる。ここで、長手軸 C に平行な方向への引張りによって線状部 51 は伸長しない。このため、線状部 51 において、ループ状部 59 以外の部分の線芯軸 L に沿った寸法が大きくなることにより、ループ状部 59 の線芯軸 L に沿った寸法が小さくなる。すなわち、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 21 の伸長に対応して、線状部 51 は、伸長されることなく変形する。

10

【0041】

長手軸 C に平行な方向についてマルチルーメンチューブ 21 が伸長することにより、長手軸 C に平行な方向についての第 1 の孔 55A の寸法及び第 2 の孔 57A の寸法が、大きくなる。また、ループ状部 59 の線芯軸 L に沿った寸法が小さくなることにより、第 1 の孔 55A と第 2 の孔 57A との間では、ループ状部 59 によってマルチルーメンチューブ 21 が圧縮される。これにより、第 1 の孔 55A と第 2 の孔 57A との間の距離が、小さくなる。なお、第 1 の孔 55B 及び第 2 の孔 57B の近傍においても、第 1 の孔 55A 及び第 2 の孔 57A の近傍と同様に、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 21 が伸長に対応して、線状部 51 が変形する。

20

【0042】

前述のように線状部 51 が変形するため、内視鏡挿入管路 37 において線状部 51 に弛み E1 ~ E3 が発生しない状態でも、マルチルーメンチューブ 21 の伸長に対応して線状部 51 が変形可能となる。すなわち、線状部 51 にループ状部 59 を設けることにより、内視鏡挿入管路 37 において線状部 51 に弛み E1 ~ E3 を発生させることなく、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 21 の伸長に対応して線状部 51 が変形する。内視鏡挿入管路 37 において線状部 51 に弛み E1 ~ E3 を発生させないことにより、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 37 への挿入性が向上する。

30

【0043】

なお、第 1 の参照例では、それぞれの第 1 の孔 55A, 55B は対応する第 2 の孔 57A, 57B より基端方向側に位置しているが、これに限るものではない。例えば、第 3 の参照例として図 11 に示すように、それぞれの第 1 の孔 55A, 55B が対応する第 2 の孔 57A, 57B より先端方向側に位置してもよい。本変形でも、長手軸 C に平行な方向についてそれぞれの第 1 の孔 55A, 55B は、対応する第 2 の孔 57A, 57B に対して離間している。なお、以下では、第 1 の孔 55A 及び第 2 の孔 57A の近傍の構成についてのみ説明するが、第 1 の孔 55B 及び第 2 の孔 57B の近傍の構成についても同様である。

【0044】

40

図 11 に示すように、内視鏡挿入管路 37 では、線状部 51 は、第 1 の孔 55A まで基端方向に向かって延設されている。そして、第 1 の孔 55A において内視鏡挿入管路 37 からマルチルーメンチューブ 21 の外部に、線状部 51 が延出される。そして、マルチルーメンチューブ 21 の外周部において、線状部 51 が、第 1 の孔 55A から第 2 の孔 57A まで基端方向に向かって延設される。そして、第 2 の孔 57A において、マルチルーメンチューブ 21 の外部から内視鏡挿入管路 37 に、線状部 51 が挿入される。そして、内視鏡挿入管路 37 において、第 2 の孔 57A から第 1 の孔 55A へ先端方向に向かって、線状部 51 が延設される。そして、再び第 1 の孔 55A を通って、内視鏡挿入管路 37 からマルチルーメンチューブ 21 の外部に、線状部 51 が延出される。そして、マルチルーメンチューブ 21 の外周部において、線状部 51 が、第 1 の孔 55A から第 2 の孔 57A

50

まで基端方向に向かって延設される。そして、再び第2の孔57Aを通過して、マルチルーメンチューブ21の外部から内視鏡挿入管路37に、線状部51が挿入される。そして、内視鏡挿入管路37において、第2の孔57Aから基端方向に向かって、線状部51が延設される。前述のように線状部51が延設されることにより、第1の孔55Aと第2の孔57Aとの間に、線状部51によってループ状部61が形成される。

【0045】

第1の参照例及び第3の参照例では、長手軸に平行な方向について第1の孔(55A, 55B)及び第2の孔(57A, 57B)は、互いに対して離間している。そして、第1の孔(55A, 55B)と第2の孔(57A, 57B)との間に、線状部51によって、ループ状部(59, 61)が形成されている。前述の構成にすることにより、内視鏡挿入管路37において線状部51に弛み(E1~E3)を発生させることなく、長手軸Cに平行な方向についてのマルチルーメンチューブ21の伸長に対応して、線状部51が変形する。

10

【0046】

また、第1の参照例では、それぞれの第1の孔55A, 55Bと対応する第2の孔57A, 57Bとの間に線状部51によってループ状部59が形成されているが、これに限るものではない。例えば、第4の参照例として図12に示すように、それぞれの第1の孔55A, 55Bと対応する第2の孔57A, 57Bとの間に、ループ状部(59, 61)が形成されなくてもよい。なお、以下では、第1の孔55A及び第2の孔57Aの近傍の構成についてのみ説明するが、第1の孔55B及び第2の孔57Bの近傍の構成についても同様である。

20

【0047】

図12に示すように、本参照例では、第1の孔55Aは、第2の孔57Aより先端方向側に位置している。内視鏡挿入管路37では、線状部51は、第1の孔55Aまで基端方向に向かって延設されている。そして、第1の孔55Aにおいて内視鏡挿入管路37からマルチルーメンチューブ21の外部に、線状部51が延出される。そして、マルチルーメンチューブ21の外周部において、線状部51が、第1の孔55Aから第2の孔57Aまで基端方向に向かって延設される。そして、第2の孔57Aにおいて、マルチルーメンチューブ21の外部から内視鏡挿入管路37に、線状部51が挿入される。そして、内視鏡挿入管路37において、第2の孔57Aから基端方向に向かって、線状部51が延設される。

30

【0048】

第1の参照例及び第4の参照例では、マルチルーメンチューブ21に、第1の孔(55A, 55B)及び第2の孔(57A, 57B)とは別の第2の孔(57A, 57B)が形成されている。そして、線状部51は、先端側接続位置P1と基端側接続位置P2との間において、内視鏡挿入管路37を通過して延設されている。そして、線状部51は、第1の孔(55A, 55B)において内視鏡挿入管路37からマルチルーメンチューブ21の外部に延出されるとともに、第2の孔(57A, 57B)においてマルチルーメンチューブ21の外部から内視鏡挿入管路37に挿入される。前述の構成にすることにより、挿入部5が内視鏡挿入管路37を先端方向へ移動する状態において、線状部51の弛み(E1~E3)が挿入部5に絡み難くなる。

40

【0049】

また、第1の参照例では、第1の孔55A, 55B及び第2の孔57A, 57Bがマルチルーメンチューブ21に設けられているが、これに限るものではない。例えば、第5の参照例として図13に示すように、マルチルーメンチューブ21に第1の孔(55A, 55B)及び第2の孔(57A, 57B)が設けられなくてもよい。本参照例では、線状部51は、マルチルーメンチューブ21の外部を通過することなく、先端側接続位置P1から基端側接続位置P2まで内視鏡挿入管路37に延設されている。また、本参照例でも、第1の参照例と同様に、先端側接続位置P1と基端側接続位置P2との間の線状部51の線芯軸Lに沿った線寸法S1は、先端側接続位置P1と基端側接続位置P2との間での長手軸

50

C に沿った軸平行寸法 S 2 より、大きくなる。このため、内視鏡挿入管路 3 7 では、線状部 5 1 に弛み E 4 が発生している。

【 0 0 5 0 】

第 1 の参照例及び第 5 の参照例では、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間の線状部 5 1 の線芯軸 L に沿った線寸法 S 1 は、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間での長手軸 C に沿った軸平行寸法 S 2 より、大きくなる。前述の構成にすることにより、長手軸 C に平行な方向への引張りによって伸長しない線状部 5 1 を設けた場合でも、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 2 1 の伸長性が確保される。

【 0 0 5 1 】

また、第 1 の参照例では、湾曲部 9 は長手軸 C に垂直な 2 方向に湾曲可能で、線状部 5 1 は長手軸回り方向について内視鏡 2 の湾曲部 9 の湾曲方向の一方（図 3 の矢印 B 1 の方向）と略同一の角度位置に位置しているが、これに限るものではない。例えば、第 6 の参照例として図 1 4 A に示すように、長手軸回り方向について、線状部 5 1 が湾曲部 9 の湾曲方向（図 1 4 A の矢印 B 1 の方向及び矢印 B 2 の方向）から略 90° だけ離れて、位置してもよい。すなわち、線状部 5 1 は、長手軸回り方向について、内視鏡 2 の湾曲部 9 の湾曲方向からずれた角度位置に、位置している。このため、マルチルーメンチューブ 2 1 の湾曲への線状部 5 1 の影響が、小さくなる。したがって、湾曲部 9 に追従してマルチルーメンチューブ 2 1 が湾曲し易くなり、湾曲部 9 の湾曲性が向上する。

【 0 0 5 2 】

また、第 7 の参照例として図 1 4 B に示すように、長手軸 C に垂直な 4 方向に湾曲部 9 が湾曲可能であってもよい。本参照例では、図 1 4 B の矢印 B 1 の方向及び矢印 B 2 の方向が湾曲部 9 の第 1 の湾曲方向となり、図 1 4 B の矢印 B 3 の方向及び矢印 B 4 の方向が湾曲部 9 の第 2 の湾曲方向となる。第 2 の湾曲方向は、第 1 の湾曲方向に対して垂直である。本参照例では、長手軸回り方向について湾曲部 9 の第 1 の湾曲方向の一方（図 1 4 B の矢印 B 1 の方向）から略 45° だけ離れて、線状部 5 1 が位置している。また、長手軸回り方向について湾曲部 9 の第 2 の湾曲方向の一方（図 1 4 B の矢印 B 3 の方向）から略 45° だけ離れて、線状部 5 1 が位置している。すなわち、線状部 5 1 は、長手軸回り方向について、内視鏡 2 の湾曲部 9 の第 1 の湾曲方向及び第 2 の湾曲方向からずれた角度位置に、位置している。

【 0 0 5 3 】

第 6 の参照例及び第 7 の参照例では、線状部 5 1 は、長手軸回り方向について、内視鏡 2 の湾曲部 9 の湾曲方向（第 1 の湾曲方向及び第 2 の湾曲方向）からずれた角度位置に、位置している。前述の構成にすることにより、マルチルーメンチューブ 2 1 の湾曲への線状部 5 1 の影響が、小さくなる。

【 0 0 5 4 】

また、第 1 の参照例乃至第 7 の参照例では、マルチルーメンチューブ 2 1 には、先端側固定部 2 2 及び基端側固定部 2 3 が固定されている。そして、線状部 5 1 の先端が先端側固定部 2 2 に固定され、線状部 5 1 の基端が基端側固定部 2 3 に固定されている。線状部 5 1 は、マルチルーメンチューブ 2 1 より長手軸 C に平行な方向についての引張り強度が高く、長手軸 C に平行な方向に引張られた場合でも、伸長しない。前述のように、線状部 5 1 を設けることにより、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 2 1 の引張り強度も高くなる。

【 0 0 5 5 】

また、図 1 5 A に示す第 8 の参照例では、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間に、2 つの線状部 5 1 A , 5 1 B が延設されている。線状部 5 1 A , 5 1 B は、内視鏡挿入管路 3 7 を通って、延設されている。線状部 5 1 A , 5 1 B は、環状部材 6 3 によって形成されている。本参照例でも、線状部 5 1 A , 5 1 B は、マルチルーメンチューブ 2 1 より長手軸 C に平行な方向についての引張り強度が高く、長手軸 C に平行な方向に引張られた場合でも伸長しない。

10

20

30

40

50

【 0 0 5 6 】

環状部材 6 3 の一端部には、カシメ部材 6 5 が固定されている。そして、カシメ部材 6 5 は、基端側固定部 2 3 に固定されている。これにより、基端側接続位置 P 2 で、線状部 5 1 A , 5 1 B の基端が、基端側固定部 2 3 に固定される。

【 0 0 5 7 】

また、先端側固定部 2 2 の先端側接続位置 P 1 には、先端側固定部 2 2 の外周部から内視鏡挿入管路 3 7 まで貫通する貫通孔 6 7 が、形成されている。環状部材 6 3 の他端部は、貫通孔 6 7 を介して、内視鏡挿入管路 3 7 に挿入されている。そして、環状部材は 6 3 、貫通孔 6 7 を通って先端側固定部 2 2 の外部に延出され、先端側開口部 3 8 から再び内視鏡挿入管路 3 7 に挿入される。そして、環状部材 6 3 は、環状部材 6 3 の貫通孔 6 7 から内視鏡挿入管路 3 7 に挿入された部分において、環の内側を通過する。そして、内視鏡挿入管路 3 7 において、環状部材 6 3 が基端方向へ延設される。前述のように環状部材 6 3 が延設されることにより、先端側固定部 2 2 に環状部材 6 3 が取付けられる。すなわち、ひばり結び (Cow hitch) によって、先端側固定部 2 2 に環状部材 6 3 が取付けられる。前述のように、環状部材 6 3 が先端側固定部 2 2 に取付けられることにより、先端側接続位置 P 1 で、線状部 5 1 A , 5 1 B の先端が先端側固定部 2 2 に固定される。

【 0 0 5 8 】

本参照例では、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間で、2 つの線状部 5 1 A , 5 1 B が延設されている。このため、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 2 1 の引張り強度が、さらに高くなる。したがって、長手軸 C に平行な方向についての引張りによってマルチルーメンチューブ 2 1 がさらに伸長し難くなり、長手軸 C に平行な方向への引張りによる内視鏡洗浄シース 3 の破損がさらに有効に防止される。

【 0 0 5 9 】

また、第 1 の参照例では、長手軸回り方向についてノズル 4 8 から略 1 8 0 ° 離れた角度位置に、線状部 5 1 の先端接続位置 P 1 が位置しているが、これに限るものではない。例えば第 9 の参照例として図 1 5 B に示すように、長手軸回り方向について略 6 0 ° 離れた角度位置に、線状部 5 1 の先端接続位置 P 1 が位置してもよい。

【 0 0 6 0 】

ここで、長手軸 C に垂直なある 1 つの方向を第 1 の垂直方向 (図 1 5 B の矢印 N 1 の方向) とし、第 1 の垂直方向とは反対方向を第 2 の垂直方向 (図 1 5 B の矢印 N 2 の方向) とする。本参照例では、第 1 の参照例の先端固定部 2 2 とは形状が異なる。すなわち、本参照例では、流体出射部であるノズル 4 8 が、第 2 の垂直方向に向かって突出している。ノズル 4 8 は、第 1 の垂直方向から第 2 の垂直方向に向かって空気及び水 (流体) を出射する。ノズル 4 8 の第 2 の垂直方向側の端には、出射口 4 9 が形成されている。ノズル 4 8 は、出射口 4 9 から観察窓 1 5 に向かって、流体を出射する。線状部 5 1 の先端接続位置 P 1 は、ノズル 4 8 の出射口 4 9 より第 2 の垂直方向側に位置している。なお、本参照例では、第 8 の参照例と同様に、ひばり結びによって、線状部 5 1 が先端接続位置 P 1 で先端側固定部 2 2 に固定される。

【 0 0 6 1 】

先端側固定部 2 2 では、長手軸回り方向についてノズル 4 8 に近づくにつれて、肉厚が厚くなる。このため、長手軸回り方向についてノズル 4 8 から略 6 0 ° 離れた角度位置に線状部 5 1 の先端接続位置 P 1 が位置する本参照例では、前述の参照例に比べて、肉厚の厚い部位で線状部 5 1 の先端が先端側固定部 2 2 に固定される。長手軸 C に平行な方向にマルチルーメンチューブ 2 1 が引張られた場合、線状部 5 1 に引張りによる力が作用する。このため、マルチルーメンチューブ 2 1 が引張られた場合、先端側固定部 2 2 の先端接続位置 P 1 では、線状部 5 1 から先端側固定部 2 2 に力が作用する。本参照例では、肉厚の厚い部位で線状部 5 1 の先端が先端側固定部 2 2 に固定されるため、線状部 5 1 からの力による先端側固定部 2 2 の破損が、有効に防止される。

【 0 0 6 2 】

ノズル 4 8 からの空気又は水を噴射は、第 1 の垂直方向が鉛直下方向となる状態で、行

10

20

30

40

50

われる。このため、鉛直上方向となる第2の垂直方向に向かってノズル48から噴射された水は、重力によって第1の垂直方向へ移動し、噴射口49の近傍に戻る。本参照例では、水を溜め易い線状部51が、噴射口49より第2の垂直方向側の先端接続位置P1で、先端側固定部22に固定される。すなわち、水を溜め易い線状部51は、ノズル48の噴射口49から離れた位置に、位置している。このため、噴射口49から噴射された水が噴射口49の近傍に大量に溜まることが、有効に防止される。噴射口49の近傍に大量の水が溜まらないため、噴射口49から空気を噴射した場合に、噴射した空気によって溜まった水が第2の垂直方向へ向かって吹上げられることが、有効に防止される。

【0063】

次に、第10の参照例について、図16乃至図19Bを参照して説明する。

10

【0064】

図16は、本参照例の内視鏡洗浄シース3を示す図である。図16に示すように、本参照例でも、内視鏡洗浄シース3に、マルチルーメンチューブ21、先端側固定部22、及び、基端側固定部23が設けられている。本参照例では、シース本体であるマルチルーメンチューブ21に、複数の孔81A、81Bが孔規定部82によって規定されている。孔81Aは、孔81Bよりも基端方向側に位置している。

【0065】

図17及び図18は、ある1つの孔81Aの近傍でのマルチルーメンチューブ21及び線状部51の構成を示す図である。なお、以下では、孔81Aの近傍の構成についてののみ説明するが、孔81Bの近傍の構成についても、同様である。また、本参照例では、2つの孔81A、81Bが設けられているが、1つ以上の孔(81A、81B)が、マルチルーメンチューブ21に規定されていればよい。図17及び図18に示すように、孔81Aによって、内視鏡挿入管路37とマルチルーメンチューブ21の外部との間が連通している。

20

【0066】

本参照例でも、第1の参照例と同様に、線状部51は、先端側接続位置P1と基端側接続位置P2との間において内視鏡挿入管路37を通して、線芯軸Lに沿って延設されている。内視鏡挿入管路37では、線状部51は、孔81Aまで基端方向に向かって延設されている。線状部51には、孔81A(81B)において内視鏡挿入管路37からマルチルーメンチューブ21の外部に延出される外部延出部83が、設けられている。また、線状部51には、孔81A(81B)においてマルチルーメンチューブ21の外部から内視鏡挿入管路37に挿入される管路挿入部85が、設けられている。外部延出部83と管路挿入部85との間では、線状部51はマルチルーメンチューブ21の周方向(長手軸回り方向)に延設されている。すなわち、線状部51には、外部延出部83と管路挿入部85との間でマルチルーメンチューブ21の周方向に延設される周方向延設部86が、設けられている。周方向延設部86は、孔81Aから孔81Aまでマルチルーメンチューブ21の外周部を一周する状態に、延設されている。孔81Aから内視鏡挿入管路37に挿入された線状部51は、孔81Aから基端方向に向かって延設される。

30

【0067】

本参照例でも、線状部51を設けることにより、長手軸Cに平行な方向についてのマルチルーメンチューブ21の引張り強度も高くなる。したがって、長手軸Cに平行な方向についての引張りによってマルチルーメンチューブ21が伸長し難くなり、長手軸Cに平行な方向への引張りによる内視鏡洗浄シース3の破損が有効に防止される。

40

【0068】

また、前述のように線状部51が延設されるため、第1の参照例と同様に、先端側接続位置P1と基端側接続位置P2との間の線状部51の線芯軸Lに沿った線寸法S1は、先端側接続位置P1と基端側接続位置P2との間での長手軸Cに沿った軸平行寸法S2より、大きくなる。このため、線状部51に弛みが発生する。したがって、長手軸Cに平行な方向への引張りによって伸長しない線状部51を設けた場合でも、湾曲部9の湾曲性等が確保される。

50

【 0 0 6 9 】

また、本参照例の線状部 5 1 は、孔 8 1 A (8 1 B) において、外部延出部 8 3 がマルチルーメンチューブ 2 1 の外部に延出される。そして、線状部 5 1 は、マルチルーメンチューブ 2 1 の外周部において周方向延設部 8 6 が周方向に延設され、孔 8 1 A (8 1 B) から管路挿入部 8 5 が内視鏡挿入管路 3 7 に挿入される。前述のように線状部 5 1 が延設されるため、挿入部 5 が内視鏡挿入管路 3 7 を先端方向へ移動する状態において、孔 8 1 A (8 1 B) より基端方向側に位置していた弛みは、孔 8 1 A (8 1 B) より先端方向側に移動しない。これにより、第 1 の参照例と同様に、挿入部 5 が内視鏡挿入管路 3 7 を先端方向へ移動する状態において、線状部 5 1 の弛みが挿入部 5 に絡み難くなる。したがって、線状部 5 1 に弛みが発生する場合でも、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 への挿入性が確保される。

10

【 0 0 7 0 】

また、本参照例では、孔 8 1 A (8 1 B) の近傍において前述のように線状部 5 1 が延設されるため、マルチルーメンチューブ 2 1 が長手軸 C に平行な方向に引張られた場合でも、孔 8 1 A (8 1 B) において線状部 5 1 からマルチルーメンチューブ 2 1 に大きな力が作用しない。したがって、線状部 5 1 からマルチルーメンチューブ 2 1 へ作用する力によるマルチルーメンチューブ 2 1 の破損が、有効に防止される。

【 0 0 7 1 】

図 1 9 A 及び図 1 9 B は、ある 1 つの孔 8 1 A の近傍での線状部 5 1 の延設状態を示す図である。図 1 9 A は、内視鏡 2 へ内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態を示し、図 1 9 B は、内視鏡 2 からの内視鏡洗浄シース 3 の取外しにおいて、挿入部 5 が内視鏡挿入管路 3 7 を基端方向へ移動している状態を示す図である。図 1 9 A 及び図 1 9 B に示すように、孔 8 1 A (8 1 B) では、外部延出部 8 3 が管路挿入部 8 5 に引掛っている (hitche s) 。図 1 9 A に示すように、内視鏡 2 へ内視鏡洗浄シース 3 を取付けた状態では、第 1 の参照例と同様に、長手軸 C に平行な方向について内視鏡挿入管路 3 7 の全長に渡って線状部 5 1 の弛み E 4 , E 5 が分散される。ここで、弛み E 4 は、孔 8 1 A と孔 8 1 B との間に発生する弛みであり、弛み E 5 は、孔 8 1 A より基端方向側に発生する弛みである。

20

【 0 0 7 2 】

図 1 9 B に示すように、内視鏡 2 からの内視鏡洗浄シース 3 の取外しにおいて、挿入部 5 が内視鏡挿入管路 3 7 を基端方向へ移動することにより、内視鏡挿入管路 3 7 において弛み E 4 , E 5 は、挿入部 5 によって基端方向へ押圧される。これにより、弛み E 4 , E 5 が基端方向へ移動する。本参照例の線状部 5 1 は、孔 8 1 A において外部延出部 8 3 が管路挿入部 8 5 に引掛っている。このため、孔 8 1 A より基端方向側の弛み E 5 が基端方向へ移動することにより、孔 8 1 A において外部延出部 8 3 に管路挿入部 8 5 が当接し、孔 8 1 A において外部延出部 8 3 及び管路挿入部 8 5 が互いに対して押圧し合う。孔 8 1 A で外部延出部 8 3 及び管路挿入部 8 5 が互いに対して押圧し合うことにより、孔 8 1 A と孔 8 1 B との間の弛み E 4 (すなわち、孔 8 1 A より先端方向側の弛み E 4) の孔 8 1 A より基端方向側への移動が、有効に防止される。孔 8 1 A より基端方向側への弛み E 4 の移動が防止されることにより、挿入部 5 を内視鏡挿入管路 3 7 から抜脱した後に、孔 8 1 A より基端方向側の部位での弛みの密集が有効に防止される。

30

40

【 0 0 7 3 】

前述のように、本参照例では、内視鏡 2 からの内視鏡洗浄シース 3 の取外しによって内視鏡挿入管路 3 7 の基端方向側の部位に線状部 5 1 の弛み E 4 , E 5 が密集しない。したがって、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の着脱を繰り返した後でも、内視鏡挿入管路 3 7 の基端方向側の部位に線状部 5 1 の弛み E 4 , E 5 が密集しない。これにより、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の着脱を繰り返した後でも、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 への挿入性が確保される。

【 0 0 7 4 】

なお、第 1 1 の参照例として図 2 0 に示すように、第 1 の参照例での線状部 5 1 の延設状態及び第 1 0 の参照例での線状部 5 1 の延設状態を組合わせてもよい。本参照例では、

50

マルチルーメンチューブ 2 1 に、第 1 の参照例の第 1 の孔 5 5 A , 5 5 B と同様の構成の第 1 の孔 5 5 と、第 1 の参照例の第 2 の孔 5 7 A , 5 7 B と同様の構成の第 2 の孔 5 7 と、第 1 0 の参照例の孔 8 1 A , 8 1 B と同様の構成の第 3 の孔 8 1 と、が設けられている。

【 0 0 7 5 】

本参照例では、第 1 の孔 5 5 は第 2 の孔 5 7 より基端方向側に位置している。そして、第 3 の孔 8 1 は、第 1 の孔 5 5 及び第 2 の孔 5 7 より基端方向側に位置している。線状部 5 1 は、第 1 の孔 5 5 及び第 2 の孔 5 7 の近傍では、第 1 の参照例の第 1 の孔 5 5 A 及び第 2 の孔 5 7 A の近傍での延設状態と同様に、延設されている。すなわち、内視鏡挿入管路 3 7 では、線状部 5 1 は、第 1 の孔 5 5 まで基端方向に向かって延設されている。そして、第 1 の孔 5 5 において内視鏡挿入管路 3 7 からマルチルーメンチューブ 2 1 の外部に、線状部 5 1 が延出される。そして、マルチルーメンチューブ 2 1 の外周部において、線状部 5 1 が、第 1 の孔 5 5 から第 2 の孔 5 7 まで先端方向に向かって延設される。そして、第 2 の孔 5 7 において、マルチルーメンチューブ 2 1 の外部から内視鏡挿入管路 3 7 に、線状部 5 1 が挿入される。そして、内視鏡挿入管路 3 7 において、第 2 の孔 5 7 から基端方向に向かって、線状部 5 1 が延設される。このため、第 1 の孔 5 5 と第 2 の孔 5 7 との間に、線状部 5 1 によってループ状部 5 9 が形成されている。

【 0 0 7 6 】

また、本参照例では、線状部 5 1 は、第 3 の孔 8 1 の近傍において、第 1 0 の参照例の孔 8 1 A の近傍での延設状態と同様に、延設されている。すなわち、線状部 5 1 は、第 3 の孔 8 1 において内視鏡挿入管路 3 7 から外部延出部 8 3 がマルチルーメンチューブ 2 1 の外部に延出され、第 3 の孔 8 1 においてマルチルーメンチューブ 2 1 の外部から管路挿入部 8 5 が内視鏡挿入管路 3 7 に挿入される。そして、外部延出部 8 3 と管路挿入部 8 5 との間では、線状部 5 1 の周方向延設部 8 6 がマルチルーメンチューブ 2 1 の周方向（長手軸回り方向）に延設されている。本参照例でも、第 1 の参照例及び第 1 0 の参照例と同様に、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 への挿入性が確保される。

【 0 0 7 7 】

次に、第 1 2 の参照例について、図 2 1 を参照して説明する。

【 0 0 7 8 】

図 2 1 は、本参照例の内視鏡洗浄シース 3 の構成を示す図である。図 2 1 に示すように、本参照例でも、内視鏡洗浄シース 3 には、シース本体であるマルチルーメンチューブ 2 1、先端側固定部 2 2、及び、基端側固定部 2 3 が設けられている。そして、線状部 5 1 は、先端側接続位置 P 1 で先端側固定部 2 2 に先端が固定され、基端側接続位置 P 2 で基端側固定部 2 3 に基端が固定されている。ただし、本参照例では、線状部 5 1 は、内視鏡挿入管路 3 7 を通過せず、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 までマルチルーメンチューブ 2 1 の外周部に延設されている。

【 0 0 7 9 】

本参照例でも第 1 の参照例と同様に、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間の線状部 5 1 の線芯軸 L に沿った線寸法 S 1 は、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間での長手軸 C に沿った軸平行寸法 S 2 より、大きくなる。また、線状部 5 1 は、長手軸回り方向について、内視鏡 2 の湾曲部 9 の湾曲方向（図 2 1 の矢印 B 1 の方向及び矢印 B 2 の方向）からずれた角度位置に、位置している。

【 0 0 8 0 】

本参照例でも、線状部 5 1 を設けることにより、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 2 1 の引張り強度も高くなる。したがって、長手軸 C に平行な方向についての引張りによってマルチルーメンチューブ 2 1 が伸長し難くなり、長手軸 C に平行な方向への引張りによる内視鏡洗浄シース 3 の破損が有効に防止される。

【 0 0 8 1 】

また、本参照例では、線状部 5 1 は、内視鏡挿入管路 3 7 を通過せず、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 までマルチルーメンチューブ 2 1 の外周部に延設されている

。したがって、線状部 5 1 を設けた場合でも、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 への挿入性が確保される。

【 0 0 8 2 】

なお、第 1 3 の参照例として図 2 2 に示すように、線状部 5 1 が、マルチルーメンチューブ 2 1 の外周部に、長手軸 C に平行な方向について螺旋状に、延設されてもよい。すなわち、線状部 5 1 は、長手軸 C に平行な方向について螺旋状に延設される螺旋部 7 1 を備える。本参照例でも、第 1 0 の参照例と同様に、線状部 5 1 は、内視鏡挿入管路 3 7 を通過せず、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 までマルチルーメンチューブ 2 1 の外周部に延設されている。

【 0 0 8 3 】

本参照例では、線状部 5 1 が螺旋状に延設されるため、湾曲部 9 の湾曲動作に追従してマルチルーメンチューブ 2 1 が湾曲した状態で、線状部 5 1 も湾曲部 9 の湾曲動作に追従し易くなる。したがって、湾曲部 9 の湾曲性がさらに向上する。

【 0 0 8 4 】

次に、第 1 4 の参照例について、図 2 3 を参照して説明する。

【 0 0 8 5 】

図 2 3 は、本参照例の内視鏡洗浄シース 3 のマルチルーメンチューブ 2 1 の内部構成を示す図である。本参照例でも、内視鏡洗浄シース 3 には、シース本体であるマルチルーメンチューブ 2 1、先端側固定部 2 2、及び、基端側固定部 2 3 が設けられている。そして、線状部 5 1 は、先端側接続位置 P 1 で先端側固定部 2 2 に先端が固定され、基端側接続位置 P 2 で基端側固定部 2 3 に基端が固定されている。また、図 2 3 に示すように、マルチルーメンチューブ 2 1 には、内視鏡挿入管路 3 7、送気管路 4 2、及び、送水管路 4 3 が規定されている。そして、流体管路である送気管路 4 2 及び送水管路 4 3 は、内視鏡挿入管路 3 7 から分離されている。ただし、本参照例では、線状部 5 1 は、内視鏡挿入管路 3 7 を通過せず、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 まで送気管路 4 2 に延設されている。

【 0 0 8 6 】

本参照例でも第 1 の参照例と同様に、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間の線状部 5 1 の線芯軸 L に沿った線寸法 S 1 は、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間での長手軸 C に沿った軸平行寸法 S 2 より、大きくなる。また、線状部 5 1 は、長手軸回り方向について、内視鏡 2 の湾曲部 9 の湾曲方向（図 2 3 の矢印 B 1 の方向及び矢印 B 2 の方向）からずれた角度位置に、位置している。

【 0 0 8 7 】

本参照例でも、線状部 5 1 を設けることにより、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 2 1 の引張り強度も高くなる。したがって、長手軸 C に平行な方向についての引張りによってマルチルーメンチューブ 2 1 が伸長し難くなり、長手軸 C に平行な方向への引張りによる内視鏡洗浄シース 3 の破損が有効に防止される。

【 0 0 8 8 】

また、本参照例では、線状部 5 1 は、内視鏡挿入管路 3 7 を通過せず、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 まで送気管路 4 2 に延設されている。したがって、線状部 5 1 を設けた場合でも、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 への挿入性が確保される。

【 0 0 8 9 】

なお、第 1 4 の参照例では線状部 5 1 は送気管路 4 2 に延設されているが、ある参照例では、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 まで線状部 5 1 が送水管路 4 3 に延設されてもよい。また、別のある参照例では、2 つの線状部 5 1 が設けられ、一方の線状部 5 1 が送気管路 4 2 に延設され、他方の線状部 5 1 が送水管路 4 3 に延設されてもよい。

【 0 0 9 0 】

第 1 4 の参照例等では、内視鏡挿入管路 3 7 から分離された流体管路（4 2，4 3）が、規定されている。そして、線状部 5 1 は、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 まで流体管路（4 2，4 3）に、延設されている。これにより、線状部 5 1 を設けた場合

10

20

30

40

50

でも、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 への挿入性が確保される。

【0091】

次に、第 1 5 の参照例について、図 2 4 を参照して説明する。

【0092】

図 2 4 は、本参照例の内視鏡洗浄シース 3 のマルチルーメンチューブ 2 1 の内部構成を示す図である。本参照例でも、内視鏡洗浄シース 3 には、シース本体であるマルチルーメンチューブ 2 1、先端側固定部 2 2、及び、基端側固定部 2 3 が設けられている。そして、線状部 5 1 は、先端側接続位置 P 1 で先端側固定部 2 2 に先端が固定され、基端側接続位置 P 2 で基端側固定部 2 3 に基端が固定されている。また、図 2 4 に示すように、マルチルーメンチューブ 2 1 には、内視鏡挿入管路 3 7、送気管路 4 2、及び、送水管路 4 3 が規定されている。そして、流体管路である送気管路 4 2 及び送水管路 4 3 は、内視鏡挿入管路 3 7 から分離されている。ただし、本参照例では、シース本体であるマルチルーメンチューブ 2 1 に、内視鏡挿入管路 3 7 及び流体管路（送気管路 4 2 及び送水管路 4 3）から分離された状態で、分離管路 7 2 が分離管路規定部 7 3 によって規定されている。そして、線状部 5 1 は、内視鏡挿入管路 3 7 を通過せず、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 まで分離管路 7 2 に延設されている。

10

【0093】

本参照例でも第 1 の参照例と同様に、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間の線状部 5 1 の線芯軸 L に沿った線寸法 S 1 は、先端側接続位置 P 1 と基端側接続位置 P 2 との間での長手軸 C に沿った軸平行寸法 S 2 より、大きくなる。また、線状部 5 1 は、長手軸回り方向について、内視鏡 2 の湾曲部 9 の湾曲方向（図 2 4 の矢印 B 1 の方向及び矢印 B 2 の方向）からずれた角度位置に、位置している。

20

【0094】

本参照例でも、線状部 5 1 を設けることにより、長手軸 C に平行な方向についてのマルチルーメンチューブ 2 1 の引張り強度も高くなる。したがって、長手軸 C に平行な方向についての引張りによってマルチルーメンチューブ 2 1 が伸長し難くなり、長手軸 C に平行な方向への引張りによる内視鏡洗浄シース 3 の破損が有効に防止される。

【0095】

また、本参照例では、線状部 5 1 は、内視鏡挿入管路 3 7 を通過せず、先端側接続位置 P 1 から基端側接続位置 P 2 まで分離管路 7 2 に延設されている。したがって、線状部 5 1 を設けた場合でも、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 への挿入性が確保される。

30

【0096】

（第 1 の実施形態）

次に、本発明の第 1 の実施形態について、図 2 5 乃至図 2 8 を参照して説明する。なお、以下の説明では、前述の参照例と同一の部分については同一の符号を付して、その説明は省略する。

【0097】

図 2 5 は、本実施形態の内視鏡洗浄シース 3 の構成を示す図である。本実施形態でも、内視鏡洗浄シース 3 には、シース本体であるマルチルーメンチューブ 2 1、先端側固定部 2 2 及び基端側固定部 2 3 が設けられている。そして、マルチルーメンチューブ 2 1 には、挿入管路規定部 3 6 によって内視鏡挿入管路 3 7 が長手軸 C に沿って規定されている。なお、本実施形態では、線状部 5 1 は、設けられていない。

40

【0098】

図 2 6 は、図 2 5 の 2 6 - 2 6 線断面図である。図 2 6 に示すように、本実施形態でも第 1 の参照例と同様に、送気管路 4 2 及び送水管路 4 3 が、流体管路規定部 4 1 によって規定されている。また、マルチルーメンチューブ 2 1 は、シリコンから押出し成形（extrusion molding）によって形成され、可撓性を有する。押出し成形によって形成されるため、マルチルーメンチューブ 2 1 では、図 2 5 に示すように、長手軸 C に平行な方向について全長に渡って、長手軸 C に垂直な断面が同一形状となる。このため、内視鏡挿入管路 3 7 は、長手軸 C に平行な方向について全長に渡って、長手軸 C に垂直な断面が同一形

50

状となる。すなわち、挿入管路規定部 36 は、長手軸 C に平行な方向について全長に渡って、内視鏡挿入管路 37 の径寸法を第 1 の径寸法 D1 に規定している。

【0099】

図 27 は、図 25 の 27 - 27 線断面図である。図 25 及び図 27 に示すように、本実施形態でも第 1 の参照例と同様に、先端側固定部 22 に、合流部 47 及び流体出射部であるノズル 48 が設けられている。先端側固定部 22 は、ポリスルホン (polysulfone) 等のマルチルーメンチューブ 21 より硬い材料から形成されている。

【0100】

本実施形態では、中継管路規定部 91 によって、先端側固定部 22 に中継管路 92 が規定されている。中継管路 92 の基端は、内視鏡挿入管路 37 の先端と連通している。先端固定部 22 には、先端側開口部 38 が設けられている。中継管路 92 の先端は、先端側開口部 38 で、先端側固定部 22 の外部に対して開口している。したがって、先端側開口部 38 は、中継管路 92 を介して、内視鏡挿入管路 37 に連通している。

【0101】

中継管路規定部 91 は、長手軸 C に平行な方向について全長に渡って、中継管路 92 の径寸法を第 2 の径寸法 D2 に規定している。第 2 の径寸法 D2 は、内視鏡挿入管路 37 の第 1 の径寸法 D1 より、小さい。このため、挿入管路規定部 36 と中継管路規定部 91 との間には、段差部 93 が形成されている。図 28 は、本実施形態の内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態での内視鏡 2 の先端部及び内視鏡洗浄シース 3 の先端部の構成を示す図である。図 28 に示すように、中継管路 92 の第 2 の径寸法 D2 は、挿入部 5 の外径寸法 D0 より大きい。ただし、第 2 の寸法 D2 と挿入部 5 の外径寸法 D0 との差は、0.1 mm 以下である。このため、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態では、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 91 との間は、ほとんど隙間がない状態となる。

【0102】

また、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態では、挿入部 5 の湾曲部 9 は、中継管路 92 の基端 (すなわち、中継管路規定部 91 の基端) より基端方向側に位置している。したがって、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態では、湾曲部 9 は、可撓性を有するマルチルーメンチューブ 21 の内部に設けられる内視鏡挿入管路 37 に、位置している。また、先端側固定部 22 の中継管路規定部 91 には、シリコンオイル、シリコンコート等の撥水コーティング 95 が、薄くコーティングされている。

【0103】

前記特許文献 1 及び前記特許文献 2 のそれぞれの内視鏡洗浄シースでは、シース本体であるマルチルーメンチューブの先端面に先端側開口部が設けられている。そして、内視鏡挿入管路の先端が、先端側開口部で、先端側固定部材の外部に対して直接的に開口している。このような構成の場合、内視鏡洗浄シースを内視鏡に取付けた状態において、内視鏡挿入管路を規定する挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間に、先端開口部から水が流入し易い。このため、挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間に、水が溜まり易い。挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間に水が溜まった状態で観察窓を通して観察を行った場合、挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間から挿入部の先端面に水が流出する可能性がある。挿入部の先端面に水が流出することにより、観察窓に水が付着し、被写体の観察性能が低下してしまう。

【0104】

マルチルーメンチューブにおいて内視鏡挿入管路の径寸法を小さくすることにより、挿入管路規定部と挿入部の外周部との間の隙間は、小さくなる。しかし、シース本体であるマルチルーメンチューブは、押出し成形によって形成されるため、長手軸に平行な方向について全長に渡って長手軸に垂直な断面が同一形状となる。このため、内視鏡挿入管路の径寸法を小さくする場合には、長手軸に平行な方向について全長に渡って内視鏡挿入管路の径寸法を小さくする必要がある。また、一般に、マルチルーメンチューブは可撓性を有する材料から形成されている。全長に渡って径寸法が小さい内視鏡挿入管路が可撓性を有

するマルチルーメンチューブに形成される場合、挿入部の内視鏡挿入管路での移動において、挿入部の外周部と挿入管路規定部との間の摩擦抵抗が大きくなる。このため、内視鏡挿入管路への挿入部の挿入性及び内視鏡挿入管路からの挿入部の抜脱性が低下してしまう。すなわち、内視鏡挿入管路での挿入部の移動性が低下してしまう。

【 0 1 0 5 】

そこで、本実施形態では、後述するようにして、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間に水が溜まり難く、内視鏡挿入管路 3 7 での挿入部 5 の移動性が確保される内視鏡洗浄シース 3 及び内視鏡装置 1 を提供する。すなわち、本実施形態では、先端側固定部 2 2 に、内視鏡挿入管路 3 7 の先端に基端が連通する中継管路 9 2 が、規定されている。そして、中継管路 9 2 の先端は、先端側固定部 2 2 の外部に対して開口している。中継管路 9 2 では、長手軸 C に平行な方向について全長に渡って、内視鏡挿入管路 3 7 の第 1 の径寸法 D 1 より小さい第 2 の径寸法 D 2 となる。中継管路 9 2 の第 2 の径方向寸法 D 2 が小さいため、内視鏡洗浄シース 3 を内視鏡 2 に取付けた状態において、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間が、小さくなる。このため、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間を水が通過し難くなり、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間への先端側開口部 3 8 からの水の流入が、有効に防止される。したがって、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間へ水が溜まり難くなる。

【 0 1 0 6 】

また、本実施形態では、挿入部 5 の外径寸法 D 0 と第 2 の径寸法 D 2 との差が 0 . 1 m m 以下である。このため、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間を水がさらに通過し難くなり、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間への先端側開口部 3 8 からの水の流入が、さらに有効に防止される。

【 0 1 0 7 】

また、本実施形態では、中継管路規定部 9 1 に撥水コーティング 9 5 がコーティングされている。このため、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間を水がさらに通過し難くなり、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間への先端側開口部 3 8 からの水の流入が、さらに有効に防止される。

【 0 1 0 8 】

前述のように、本実施形態では、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間への先端側開口部 3 8 からの水の流入が防止されるため、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間へ水が溜まり難くなる。このため、観察窓を通して観察を行う場合に、観察窓への水の付着が防止され、被写体の観察性能が確保される。

【 0 1 0 9 】

また、可撓性を有するマルチルーメンチューブ 2 1 に設けられる内視鏡挿入管路 3 7 では、長手軸 C に平行な方向について全長に渡って、径寸法が、第 2 の径寸法 D 2 より大きい第 1 の径寸法 D 1 となる。このため、挿入部 5 の内視鏡挿入管路 3 7 での移動において、挿入部 5 の外周部と挿入管路規定部 3 6 との間の摩擦抵抗が大きくなる。このため、内視鏡挿入管路 3 7 への挿入部 5 の挿入性及び内視鏡挿入管路 3 7 からの挿入部 5 の抜脱性が、確保される。すなわち、内視鏡挿入管路 3 7 での挿入部 5 の移動性が、確保される。

【 0 1 1 0 】

また、先端側固定部 2 2 に設けられる中継管路 6 2 では、径寸法が、第 1 の径寸法 D 1 より小さい第 2 の径寸法 D 2 となる。このため、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間は、小さくなる。ただし、先端側固定部 2 2 は、硬質な材料から形成されている。このため、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間が小さい場合でも、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の摩擦抵抗が大きくなる。したがって、中継管路 9 2 への挿入部 5 の挿入性及び中継管路 9 2 からの挿入部 5 の抜脱性が、確保される。すなわち、中継管路 9 2 での挿入部 5 の移動性が、確保される。

【 0 1 1 1 】

内視鏡挿入管路 3 7 及び中継管路 9 2 での挿入部 5 の移動性が確保されるため、内視鏡

10

20

30

40

50

2 への内視鏡洗浄シース 3 の取付け、及び、内視鏡 2 からの内視鏡洗浄シース 3 の取外しが、容易に行われる。また、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の取付け、及び、内視鏡 2 からの内視鏡洗浄シース 3 の取外しにおいて、挿入部 5 の移動の大部分は、径寸法の大きい内視鏡挿入管路 3 7 での移動である。このため、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の取付け、及び、内視鏡 2 からの内視鏡洗浄シース 3 の取外しにおいて、径寸法の小さい中継管路 9 2 を挿入部 5 が移動する距離は、小さい。したがって、内視鏡 2 への内視鏡洗浄シース 3 の取付け、及び、内視鏡 2 からの内視鏡洗浄シース 3 の取外しが、さらに容易に行われる。

【0112】

また、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態では、挿入部 5 の湾曲部 9 は、中継管路 9 2 の基端より基端方向側に位置している。すなわち、内視鏡 2 に内視鏡洗浄シース 3 が取付けられた状態では、湾曲部 9 は、可撓性を有するマルチルーメンチューブ 2 1 の内部に位置している。このため、湾曲部 9 の湾曲動作に追従して、マルチルーメンチューブ 2 1 が湾曲する。したがって、内視鏡洗浄シース 3 による湾曲部 9 の湾曲動作への影響が、小さくなる。

【0113】

(変形例)

なお、第 1 の実施形態では、長手軸 C に平行な方向について全長に渡って中継管路 9 2 の径寸法が第 2 の径寸法 D 2 となるが、これに限るものではない。例えば、第 1 の変形例として図 2 9 に示すように、中継管路規定部 9 1 に、先端方向から基端方向に向かうにつれて径寸法が小さくなるテーパ面 1 0 1 が、設けられてもよい。本変形例では、テーパ面 1 0 1 の基端で、中継管路 9 2 の径寸法が、内視鏡挿入管路 3 7 の第 1 の径寸法 D 1 より小さい第 2 の径寸法 D 2 となる。このため、テーパ面 1 0 1 の基端では、内視鏡洗浄シース 3 を内視鏡 2 に取付けた状態において、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間が、小さくなる。これにより、テーパ面 1 0 1 の基端において挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間を水が通過し難くなり、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間への先端側開口部 3 8 からの水の流入が、有効に防止される。したがって、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間へ水が溜まり難くなる。

【0114】

また、例えば第 2 の変形例として図 3 0 に示すように、中継管路規定部 9 1 に、基端方向から先端方向に向かうにつれて径寸法が小さくなるテーパ面 1 0 3 が、設けられてもよい。本変形例では、テーパ面 1 0 3 の先端で、中継管路 9 2 の径寸法が、内視鏡挿入管路 3 7 の第 1 の径寸法 D 1 より小さい第 2 の径寸法 D 2 となる。このため、テーパ面 1 0 1 の先端では、内視鏡洗浄シース 3 を内視鏡 2 に取付けた状態において、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間が、小さくなる。これにより、テーパ面 1 0 1 の先端において挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間を水が通過し難くなり、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間への先端側開口部 3 8 からの水の流入が、有効に防止される。したがって、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間へ水が溜まり難くなる。

【0115】

また、例えば第 3 の変形例として図 3 1 に示すように、中継管路規定部 9 1 に、内周方向に向かって突出する突出部 1 0 5 が、設けられてもよい。突出部 1 0 5 は、長手軸 C に平行な断面において、円弧状に形成されている。本変形例では、突出部 1 0 5 の突出端で、中継管路 9 2 の径寸法が、内視鏡挿入管路 3 7 の第 1 の径寸法 D 1 より小さい第 2 の径寸法 D 2 となる。このため、突出部 1 0 5 の突出端では、内視鏡洗浄シース 3 を内視鏡 2 に取付けた状態において、挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間が、小さくなる。これにより、突出部 1 0 5 の突出端において挿入部 5 の外周部と中継管路規定部 9 1 との間の隙間を水が通過し難くなり、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間への先端側開口部 3 8 からの水の流入が、有効に防止される。したがって、挿入管路規定部 3 6 と挿入部 5 の外周部との間の隙間へ水が溜まり難くなる。

【 0 1 1 6 】

また、例えば第4の変形例として図32に示すように、中継管路規定部91に、複数の凸部107及び複数の凹部109が、長手軸Cに平行な方向について交互に並設されてもよい。本変形例では、それぞれの凸部107で、中継管路92の径寸法が、内視鏡挿入管路37の第1の径寸法D1より小さい第2の径寸法D2となる。このため、それぞれの凸部107では、内視鏡洗浄シース3を内視鏡2に取付けた状態において、挿入部5の外周部と中継管路規定部91との間の隙間が、小さくなる。これにより、それぞれの凸部107において挿入部5の外周部と中継管路規定部91との間の隙間を水が通過し難くなり、挿入管路規定部36と挿入部5の外周部との間の隙間への先端側開口部38からの水の流入が、有効に防止される。したがって、挿入管路規定部36と挿入部5の外周部との間の隙間へ水が溜まり難くなる。

10

【 0 1 1 7 】

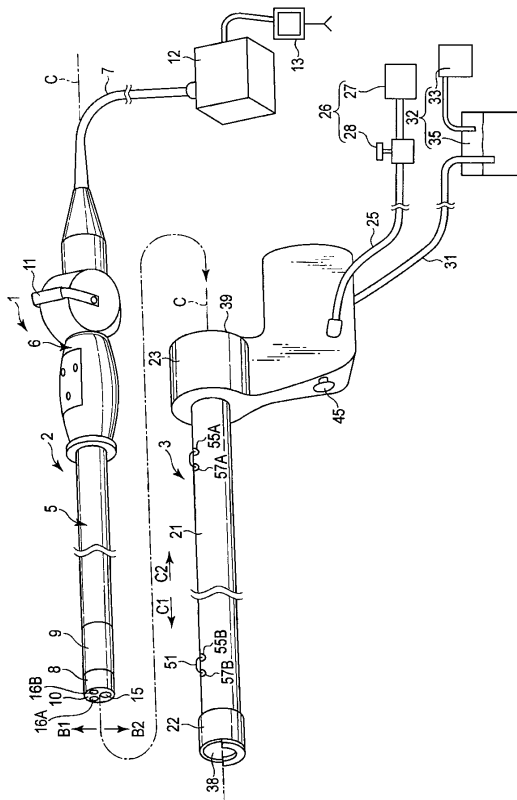
第1の実施形態及び第1の変形例乃至第4の変形例では、中継管路規定部91は、内視鏡挿入管路37の第1の径寸法D1より小さく、かつ、挿入部5の外径寸法D0より大きい第2の径寸法D2に、中継管路92の少なくとも一部の径寸法を規定している。このような構成にすることにより、挿入部5の外周部と中継管路規定部91との間の隙間を水が通過し難くなり、挿入管路規定部36と挿入部5の外周部との間の隙間への先端側開口部38からの水の流入が、有効に防止される。これにより、挿入管路規定部36と挿入部5の外周部との間の隙間へ水が溜まり難くなる。

【 0 1 1 8 】

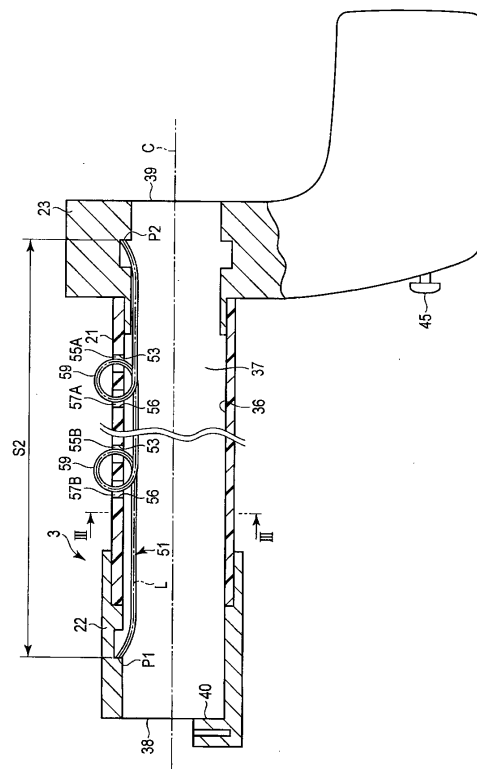
20

以上、本発明の実施形態及び変形例について説明したが、本発明は前述の実施形態及び変形例に限定されるものではなく、本発明の要旨を逸脱しない範囲で種々の変形ができることは勿論である。

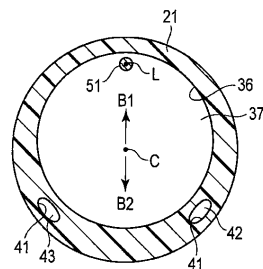
【 図 1 】



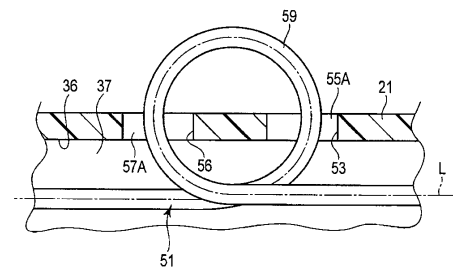
【 図 2 】



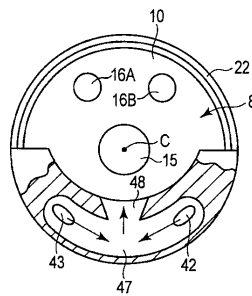
【図 3】



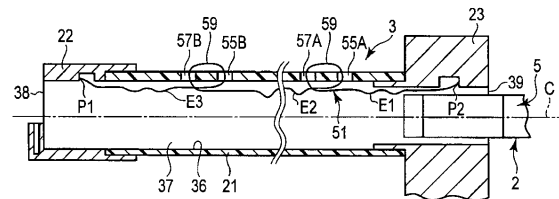
【図 5】



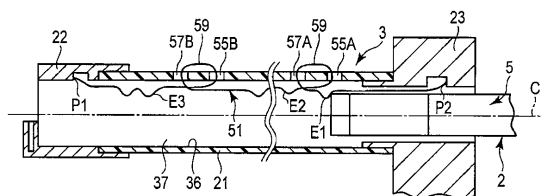
【図 4】



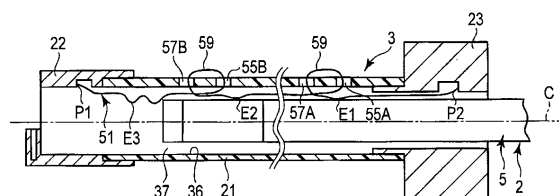
【図 6】



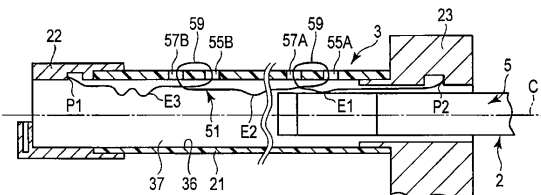
【図 7】



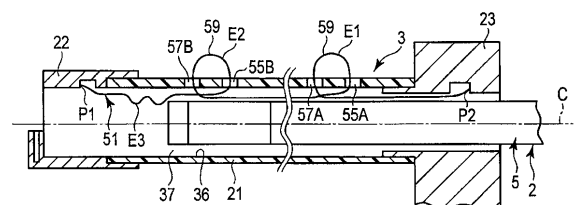
【図 9】



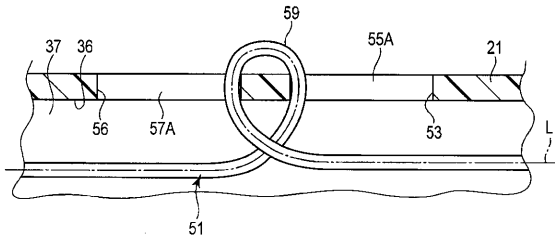
【図 8】



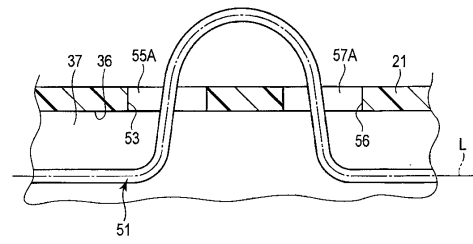
【図 10 A】



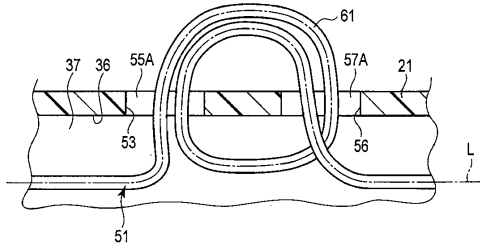
【図 10 B】



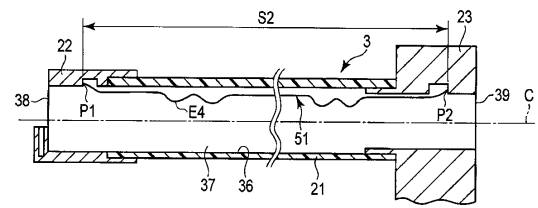
【図 12】



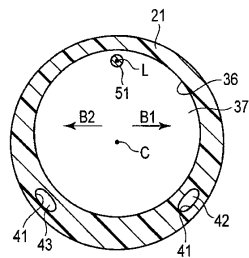
【図 11】



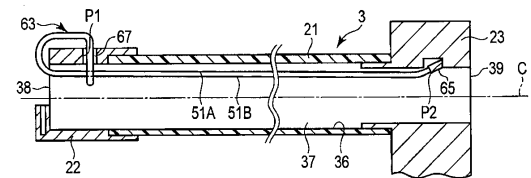
【図 13】



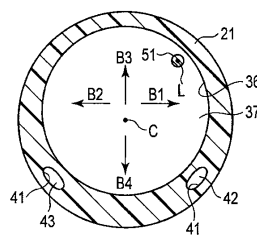
【図 14 A】



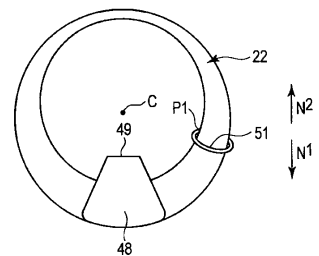
【図 15 A】



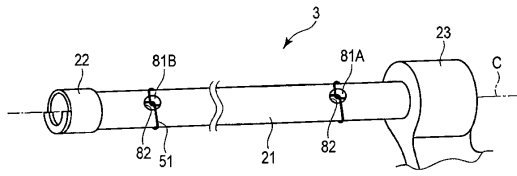
【図 14 B】



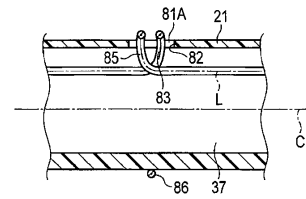
【図 15 B】



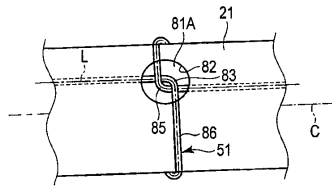
【図 16】



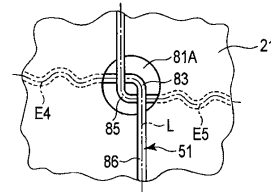
【図 18】



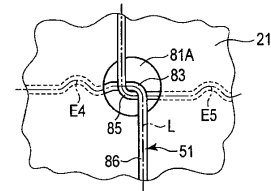
【図 17】



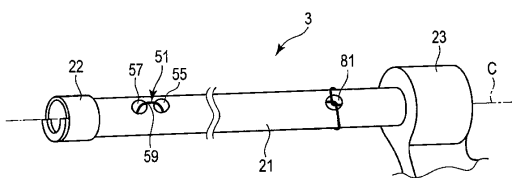
【図 19 A】



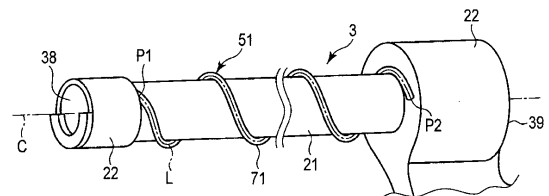
【図 19 B】



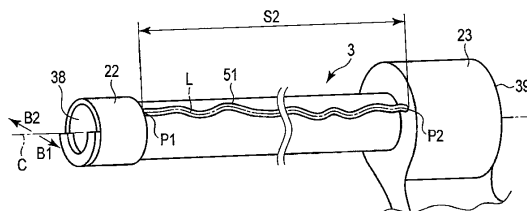
【図 20】



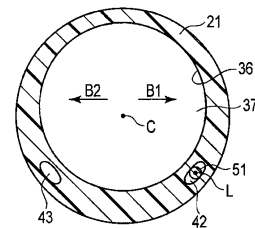
【図 22】



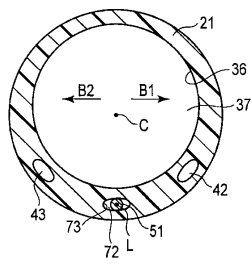
【図 21】



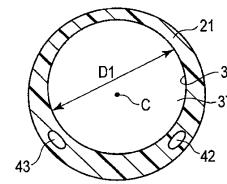
【図 23】



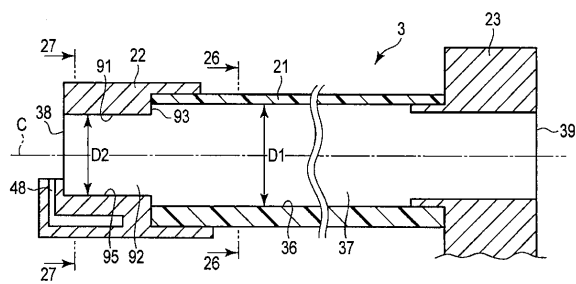
【図 24】



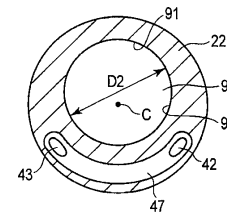
【図 26】



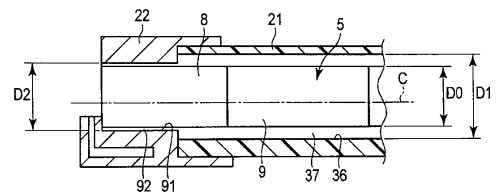
【図 25】



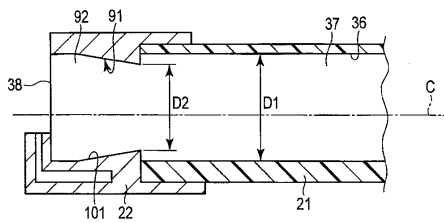
【図 27】



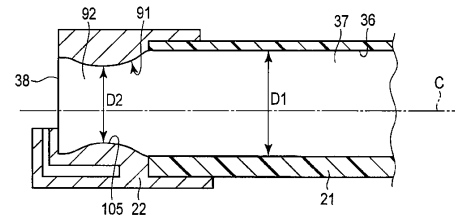
【図 28】



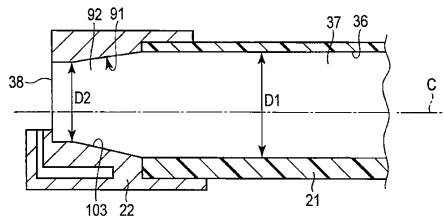
【図 29】



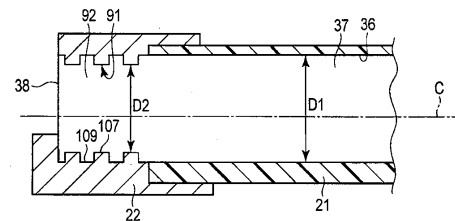
【図 31】



【図 30】



【図 32】



フロントページの続き

(74)代理人 100158805

弁理士 井関 守三

(74)代理人 100179062

弁理士 井上 正

(74)代理人 100124394

弁理士 佐藤 立志

(74)代理人 100112807

弁理士 岡田 貴志

(74)代理人 100111073

弁理士 堀内 美保子

(72)発明者 宮本 真一

東京都渋谷区幡ヶ谷 2 丁目 4 3 番 2 号 オリンパスメディカルシステムズ株式会社内

(72)発明者 藤本 隆平

東京都渋谷区幡ヶ谷 2 丁目 4 3 番 2 号 オリンパスメディカルシステムズ株式会社内

(72)発明者 新谷 圭司郎

東京都渋谷区幡ヶ谷 2 丁目 4 3 番 2 号 オリンパスメディカルシステムズ株式会社内

審査官 門田 宏

(56)参考文献 特開 2 0 0 9 - 2 2 6 1 9 6 (J P , A)

(58)調査した分野(Int.Cl. , D B 名)

A 6 1 B 1 / 0 0 - 1 / 3 2

专利名称(译)	内视镜装置		
公开(公告)号	JP5566548B2	公开(公告)日	2014-08-06
申请号	JP2014013751	申请日	2014-01-28
[标]申请(专利权)人(译)	奥林巴斯医疗株式会社		
申请(专利权)人(译)	オリンパスメディカルシステムズ株式会社		
当前申请(专利权)人(译)	オリンパスメディカルシステムズ株式会社		
[标]发明人	宮本眞一 藤本隆平 新谷圭司郎		
发明人	宮本 眞一 藤本 隆平 新谷 圭司郎		
IPC分类号	A61B1/00		
CPC分类号	A61B1/126 A61B1/00078 A61B1/00135 A61B1/005 A61B1/0055		
FI分类号	A61B1/00.300.B A61B1/00.650 A61B1/12.531 G02B23/24.A		
F-TERM分类号	2H040/DA12 2H040/DA57 2H040/EA01 4C161/FF38 4C161/GG14 4C161/HH08		
代理人(译)	河野直树 井上 正 冈田隆		
审查员(译)	门田弘		
优先权	2012202943 2012-09-14 JP		
其他公开文献	JP2014097418A		
外部链接	Espacenet		

摘要(译)

内窥镜清洁护套包括护套主体，固定到护套主体的远端部分的远侧固定部分，以及固定到护套主体的近端部分的近侧固定部分。内窥镜清洁护套包括线性部分，该线性部分具有在远侧连接位置固定到远侧固定部分的远端和在近侧连接位置固定到近侧固定部分的近端，沿着在远端侧连接位置和近侧连接位置之间的线性芯轴，并且在与护套主体平行于纵向轴线的方向上具有更高的拉伸强度。

